

統計行事

市町村

（八月）	（報告期限）
綿織物産額調（特定町村）三	日
綿織物絹綿交織物産額調（同）	五日
人口動態調査票	五日
園藝農産物 果實ノ二	十五日
水稻作況	十八日
製 藍	末日
學事年報乙款及諸表	末日
（九月）	
綿織物産額調（特定町村）三	日
絹織物及絹綿交織物産額調（同）	五日
人口動態調査票	五日
夏秋蠶豫想掃立數量	五日
園藝農産物蔬菜花卉ノ一十五日	十五日
米第一回豫想收穫高	廿三日

統計調査員

米作農家戸數調	廿三日
園藝農産物果實ノ三	末日
製 茶	末日
夏秋蠶豫想收穫高	末日
果 實 中	
（八月）	
ネーブルオレンジ、ナツミカン	三日
其ノ他ノ柑橘類	三日
ウメ、モモ、オウトウ、ビワ	十日
夏秋蠶豫想掃立數量	末日
（九月）	
夏季調査作物集計報告	十日
水稻、陸稻の反別、米作農家戸數	十日
夏秋蠶豫想收穫高	廿五日

盛夏の調べ

茨城統計（七月號目次）

◇表紙……常陸名所河原子海岸	
◇口繪……縣外視察グラフ（六種）……宮城縣の視察團一行（四種）……縣下優良町村視察團（三種）	
經濟更生と統計（卷頭言）……編輯同人【一】	
農作物統計論……農林省統計官 長 畑 健 一【二】	
統計問訪	
明朗に伸びゆく諏訪村……【一〇】	
模範村 鑛山で發展する日立町……【一九】	
勝景房總から國都へ……縣外視察記……飯岡榮助【二六】	
實務統計調査の葉	
統計相談所……【三三】	
各地統計雜信……【四一】	
回選舉肅正の歌……【五一】	
回統計優良町村視察……【三八】	
縣民の病狀調査……【四〇】	
本縣の統計映畫並に講習會……【四三】	
內閣における統計課長會議……【四四】	

錄

關東區統計事務協議會
統計の恩人柳澤伯逝去

本年の麥作は減收か
春蠶も悲觀の豫想

林産六百四十二萬餘圓

讀者の頒分
我等がまことの勞苦を知るや、武田村 境 勇【五三】
人口動態調査票作成に就て……新治村 岡田武四郎【五五】
擔任當時の思ひ出……坂 本 生【五六】
此の誇り此の法悦……小野川村 成島 一男【五八】
米生産統計を顧みて……新治村 小倉 茂【五九】

◇生産第廿六位

宮城縣の視察團……【五一】

苑文

短歌……丹 四郎選【六六】
俳句……前田 猶春選【六八】
川柳……山中 紘郎選【六九】

町村統計主任者異動

統計調査員異動

寄贈圖書

編輯後記

富岡 如夢【六四】



茨城統計七號

經濟更正と統計

夏祭りが来れど、彼の腹の底を割つて出るやうな、眞に夏をいとほしむワツシヨウの聲は、だんだん寂れていく。

盆が来れども、彼の賑やかなりし盆踊の頃は幽かにあはれである。
是れ近頃の農村風景ではないか。

けれども我等は、夏祭が寂びれた、盆踊が衰へた、さうした形の上の現はれを見て徒らに、傾向を嘆じ、徒らに貴重なる紙面を塞がうとするものではない、何が農村をして、しかく明朗を失はしめたかを考へたいのである。

申す迄もなく、これ人間生活の行詰りではあるまいか。そこでめい／＼は考へたに違ひない、斯うすればいゝか、あゝしたらいゝか、斯うもしてみよう、あゝもしてみよう。それ相當に考慮し、研究し、實行にもはいつてゐるのであらうが、そこには悶がけど悶がけど斷ち能はざぬ製きなの絆がある、そして嘲り、そして蔑む。

折角の考へぬいたことも、折角研究したことも、又折角やりかけたことも、一朝事あらば滅茶々々に覆へされてしまふといふのが現在農村の實狀である。

此の時、縣が非常なる決心を以て經濟更生に乗り出し、成るべく地方々々の實情を酌み、傳統の良俗美風を損ぜざる範圍に於て、農家の收支を考へ、生活狀態を改善して經濟の立直しを行ひ、民をして更生々活に入らしむるやう計畫されたのは洵に結構なことである。

しかも此の經濟更生たるや、基幹調査は悉く我等の統計より出で、先づ統計によつて其の村、其の町の生活狀態を究め、そして計畫に及び、實行に進むことに大體方針が定められてるやに聞く。

さなきだに我々の統計は、常に國是の基となり、施政の根幹をなしたのであるが、更に斯くして、直接わが村の、わが郷の更生に役立つことになつたとあつては、我等は一層眞剣なる關心を以て統計の完璧を期すべく努力せねばなるまい、敢て發奮を望むゆゑである。



(官統計畑長)

農作物統計論 [四]

農林省統計官 長畑健二

二、第一回並第二回豫想の歴史

豫想收穫高が統計的に取扱はれたのは明治三十六年からの事である。(明治三十六年農商務省訓令第十五號) 従來は米作開花の景況及同成熟の景況として記述的に調査して居たものを明治三十六年からは米作收穫高の豫想として之を二十十日一週間前秋分の二回に亘つて數量的に調査することとしたのである。其の後大正六年(農商務省訓令第五號)に至つて米第一回豫想收穫高及米第二回豫想收穫高として前者は九月二十日現在、後者は十月三十一日現在を以つて、夫々調査することとしたのである。其の後調査規則の全面的改正に際しても此の趣旨は變更されず、現在のものとなつて居るのである。

而して明治三十六年以降大正五年迄の豫想收穫高調査は調査の方法としては別に規定がなく單に地方長官に米作收穫等の豫想の報告を命じたのみであるから、地方長官は此の材料を如何にして蒐集したるやに就いては明瞭でない。50

大正六年の改正に當つては、特に表の注意中に

「收穫高ノ豫想ニ付テハ可成各市町村吏員ヲシテ實際ノ狀況ヲ巡視セシメ精農者數名ノ意見ヲ徵シ調査報告セシメタルモノニ依ルヘシ」と規定し豫想調査の方法を指示して居るのである。

即本調査に於いては其の理想を市町村吏員をして實地巡視すること、精農者數名の意見を徵することゝに置いたのである。

農林統計に關する報告は明治十六年の農商務通信事項以來地方長官をして調査報告せしめて居たものであつて、明治十六年の農商務通信規則と謂ひ、明治二十七年の農商務統計報告規程と謂ひ、何れも積極的に市町村吏員をして之を調査せしむべきことを國より命じたものではない。(尤も各道府縣に於ては事實は市町村吏員に總ての調査を其の儘移牒して居たものと思はれる)従つて、市町村吏員をして調査せしめる事を積極的に指示したのは、右の大正六年の訓令第五號を以て嚆矢とする。

而して其の後、大正十年農商務省令第十九號を以て農商務統計報告規則を定むるに當つて、同規則統計様式中に米第一回豫想及第二回豫想の調査を加へたのであるが、右規則に於ては統計調査は總て之を國から市町村長に直接委任したからして、當然米の豫想調査も市町村長の報告すべきものとなつたのである。而して收穫高の豫想方法としては、市町村吏員又は調査員をして、實際の狀況を巡視せしめ、精農者數名の意見を徵して豫想收穫高を決定せしむることとし、此の時から調査員をも本調査に参加せしめ得ることゝなつたのである。併し未だ、調査員をして必ず調査せしめねばならないといふ風にはなつて居らず、市町村吏員が親ら調査してもよいことになつてゐた。調査員をして必ず調査せしめねばならぬ様に定められたのは、大正十四年の農林省統計報告規則を以て始めとする。

三、第一回並第二回豫想收穫高の調査方法

現行規定たる大正十四年農林省統計報告規則に於ては豫想收穫高調査の方法を次の様に規定して居る。
調査員ニ於テ實際ノ狀況ヲ巡回調査シ且精農者數名ノ意見ヲ徵シ調査區ニ於ケル水稻及陸稻ニ付早中晩別ニ且作柄ノ良否ニ應ジ數個ノ等級ニ分チ一段歩當ノ豫想收穫高ヲ決定シ之ヲ作付段別ヨリ無收穫見込段別ヲ控除シタル各該當ノ段別ニ乘スヘシ」
此の規定の精神とする所は調査員の實地巡回に在リと見ることを得る。即ち調査員は調査當日受持圃場を巡回して全部の作柄を調査すべきことが規定せられたのであるが、巡回に際しては受持調査區に就いて左の事項を決定するのである。

- 一 陸稻水稻の別
- 二 早中晩の別
- 三 作柄等級
- 四 各階級の一段歩當收量

右の作柄等級を假に上、中、下に分けるとすれば、理論上左の十八階級が出来る譯である

水 稻	早 (上、中、下)	陸 稻	早 (上、中、下)
	中 (上、中、下)		中 (上、中、下)
	晩 (上、中、下)		晩 (上、中、下)

右の中、水稻、陸稻の別は、頗る判然たるものであつて、問題は少しもないが、早、中、晩の別は水、陸の別程明確なるものではない。常識的な用語としては早稻と云ひ、中稻と云ひ、又晩稻と使つて別に何の問題も發生することはないが、調査區内にある總ての稻をこの三階級に必ず分類せねばならぬといふことになつても果して、問題がないであらうか。早、中、晩の區別は稻の各品種の屬性であるが如くに考へて居る向もある様であるが、成る程極く大雑把には福坊主は中生種であるとか、愛國は晩生種であるとか云ふこともあるが、これは嚴密な意味に於ての概念ではない。又統計調査に際して調査區内の稻を早、中、晩に分つて調査することの趣旨は決して所謂早生種と中生種と晩生種の品種がどうの、こうのと云ふことにあるのではなく豫想收量の調査に當つて既に登熟期に入つたものと、未だ開花明のものとの云ふ様に全然状態の異なつたものを總て混合して、一段歩收量を見積ることの不合理を避けんとするに在るのである。

元來農林省統計に於ける豫想は前述した様に稻の生育状況を觀察した結果に據るものであるから、稻の生育状態は豫想調査の最大要因である。生育状態が豫想收量を決定するものである。従つて、先づ調査の當初に於て生育状況に依つて稻を分類して置くことは當然である。即ち生育過程の相似たものを同一集團に集めることは當然のことである。この事を普通に用ひられて居る作物上の言葉で表現すれば早、中、晩に分けることである。早中晩別に分けてしまへば其の各々に屬するものは最早や同一生育程度のものばかりであるから、これについて其の作柄を見分け上中下に區分することは比較的容易であらう。斯く細分されて相似た状態になつたものについて各々の收量を豫想することになるのである。この際各階級に分かれた反別は區々であつて、この各階級の反別の收量を直に各何石と豫想することは出来ない。順序としては、第一に各階級の單位當(即一段歩當)の豫想收穫高を決定し次に之に前記の各階級の段別を乗じて各階級毎の豫想收穫高を決定することになつてゐる。市町村長は各調査員の調査したる右の豫想收穫高を合計して市町村の豫想收穫高を算出し、道府縣は市町村長の報告したる豫想收穫高を合計して、道府縣の豫想收穫高として之を農林大臣に報告し、農林省は右の道府縣の報告を合計して國の合計とするのである。右に依つてもわかる様に、農林統計に於ける豫想收穫高の調査は實際に圃場を觀察して豫想收穫高を決定するといふ本調査に於ける最も重要な部分が總て調査員に委せられて居るのである。此の點は農林統計の特徴をなすものであつて、別に豫想收穫高に限つたものではない。牛馬頭數とか農産物の生産物などになれば、兎も角も、現實に存在するもの、實際に生産されたものを捉へるのであるから、調査員であらうと、市町村吏員であらうと、捉へる人の如何によつて、其の結果に相違を來すべき筋合のものではない。客觀的に存在する事物を捉へることには主觀は入り得ない譯である。入る可能性が絶無でないにしても、極めて僅少であると考へ得る。それに引きかへ、豫想收穫高の如きは、主觀の入り得る可能性の著しく大なる種類のものであるから、觀察に當る人の如何に依つて、其の

結果に相違を來すことのあるは勿論である。農林統計に於ける豫想收穫高の正否は、實に十二萬七千人の調査員の實地觀察に際しての、稻の作柄の主觀的判斷に全く依存するものである。

而して農林統計調査に於ける第一回豫想收穫高は九月二十日現在に於て之を調査するものであるが、本調査に於ける豫想收穫高算出の基礎となり作付面積は別に九月二十日以前に於て、米の作付直後之を調査することとしてあるのであつて、此の作付面積は單に豫想收穫高のみならず、後の實收高調査に際しても基礎として利用されるものである。従つて、作付段別の調査が正確に行はれて居らねば豫想收穫高も正確には算出せられないこと勿論である。米に關しては昭和八年以來其の作付段別の調査方法が改正せられて、全國的に統一的方法で調査せらるゝこととなつたのであるが、この方法の詳細に就いては收穫高統計の際に述べることとする。唯茲に於て一言し度いのは、從來の例に徴するに、豫想收穫高の調査に使用せられる作付段別と實收高調査の際に使用せられる作付段別とに往々喰違ひを生じて居ると云ふことである。此の點は第一回豫想收穫高の際發表せらるゝ作付段別と實收高に付て發表せらるゝ作付段別との間に年々若干の開きのあることに依つて想像せられる。

第三表 米第一回豫想收穫高に於ける作付段別と實收高に於ける作付段別との比較 △は減を示す

年	第一回豫想收穫高に於ける作付段別		實收高に於ける作付段別	
	昭	和	昭	和
昭和六年	三、二四四、六五五・六 ^町	三、二四八、七三七・五 ^町	三、二四八、七三七・五 ^町	四、〇八一・九 ^町
昭和七年	三、二五四、八〇〇・一	三、二五七、五三三・五	三、二五七、五三三・五	二、七三三・四
昭和八年	三、二一〇、一〇〇・三	三、一七四、〇四一・六	三、一七四、〇四一・六	△ 三六、〇五八・七
昭和九年	三、一八〇、一九五・五	三、一七二、八七三・九	三、一七二、八七三・九	△ 七、三二一・六
昭和十年	三、二〇五、一二八・二	三、二〇四、一〇五・二	三、二〇四、一〇五・二	△ 一、〇二三・〇

四、豫想收穫高數列の分析

前述の如くして調査したる豫想收穫高の數値が如何に現れて居るか。之を實際の統計數字に就いて考察して見度るのである。一般に豫想收穫高に就いては、世俗の者は往々之を實收高と對比して其の開きを云々し、之に依つて豫想收穫高の正否を判斷せんとする傾がある。此の考は現行の我國の豫想收穫高調査の趣旨に照して決して正しいものとは云はれない。併し常に實收と同一の豫想が出来るとすればこれに越した事はないのであつて、統計關係者は此の點に付ては將來一層の研究が必要であらうと思ふ。現在の豫想制度に於ては、現實の稻の作柄を實地に調査し、これを基礎として將來ノルマル(正常)に諸條件が進行するものとして、收穫に當つて幾何の量を得ることが出来るかといふのであるから、調査時期以後に於て豫測せざる氣象の變化があれば、當然豫想と實收には開きを生ずるのであつて、此の點別に不思議はなく、寧ろ當然の事とも云へるのである。即豫想と實收との開きの起る原因としては、豫想調査時期以後に於ける氣象條件の正常よりの偏異、通俗的に言へば、思はざる氣象の變化が擧げらるゝ譯である。我々の豫測し得ざる突發的なる偶然的なる氣象の變化に伴ふ收量の變動であるから、現在の調査擔當者としては如何にしても避け難いものである。實收と豫想との開きが眞に右の如き原因に基くものである限り、之は正當なる開きであり、誰が如何なる組織で調査を行つても現在の人智を以てしては、必然的に發生する開きであると斷言し得る。然らば果たして從來の兩者の開きは右の如き原因に因るもの、みであらうか、又其の開きの大きさは幾何位であつたらうか、先づ兩者の開きに就いて次表を見て戴き度い。

第四表 米實收ニ比シ豫想收穫高ノ増減 (△印ハ減)

年次	實收高ニ比シ第一回豫想ノ増減		實收高ニ比シ第二回豫想ノ増減		其ノ年實收高ヲ前五年平均實收ニ對スル増減率
	實數	比率	實數	比率	
大正六年	四、八〇八、七三二	八・八一	三八三、八〇四	〇・七〇	△
大正七年	四、二八二、七九一	七・八三	一、〇五〇、二四八	一・九二	△
大正八年	一六五、七一六	〇・二七	一六八、六〇八	〇・二八	△
大正九年	二八九、七五四	〇・四六	△一、〇六二、〇六九	一・六八	△
大正十年	二、八八八、四四六	五・二三	五七〇、五七二	一・〇三	△
大正十一年	一、九四四、九〇五	三・二〇	一〇九、七四三	〇・一八	△
大正十二年	二、八二一、三八三	五・〇九	五六六、一五〇	一・〇二	△
大正十三年	九六九、〇五七	一・七〇	二七四、二六〇	〇・四八	△
大正十四年	一、七九三、一六四	三・〇〇	一七八、四九六	〇・三〇	△
昭和元年	三、八九八、九九〇	七・〇一	一、二二、〇三〇	二・一八	△
昭和二年	△ 六〇九、六九一	△ 〇・九八	△ 一、三三四、二四一	二・一五	△
昭和三年	九九三、一七一	一・六五	△ 六〇〇、七六九	一・〇〇	△
昭和四年	一、〇一三、一八六	一・七〇	△ 一、一八五、三八四	二・〇〇	△
昭和五年	△ 八〇〇、〇〇五	△ 〇・〇一	△ 一、五七〇、一〇五	二・三五	△
昭和六年	二、七六〇、〇四七	五・〇〇	△ 一八七、三五三	〇・三四	△
昭和七年	一、一六九、一九二	一・九四	△ 二一一、六三八	〇・三五	△
昭和八年	△ 五、一四三、四二七	△ 七・二六	△ 四、八六五、六七七	六・八七	△
昭和九年	五、一八六、五九八	一〇・〇〇	△ 一、〇九四、〇四三	二・一一	△
昭和十年	三、一〇七、六五四	五・四一	△ 三九七、二四六	〇・六九	△

右表に依つて、我々は一般に第一回豫想の方が第二回豫想よりも實收高との開きが大きであることを知る。この事を更にわかり易くする爲に開きの大小に依つて年次を分類して見ると

開きのあつた年	第一回豫想では	第二回豫想では
五百萬石代の開きのあつた年	二ヶ年	無し
四百萬石代の開きのあつた年	二ヶ年	一ヶ年
三百萬石代の開きのあつた年	二ヶ年	無し
二百萬石代の開きのあつた年	三ヶ年	無し
百萬石代以上の開きのあつた年	四ヶ年	無し
五十萬石以上の開きのあつた年	三ヶ年	七ヶ年
未滿の開きのあつた年	三ヶ年	三ヶ年
五十萬石未滿の開きのあつた年	三ヶ年	八ヶ年

となり第一回豫想では過去十九ヶ年間の開きの平均は一、七〇一、六六六石(二分九厘)であるのに、第二回豫想に於ては五二八、九一九石(九厘)となる。第一回豫想の開きの方が第二回豫想の開きよりも大きい年は十四ヶ年である。而して其の開きにはプラス(増)の場合とマイナス(減)の場合とがあるのであるが、第一回豫想に於てはプラス即實收高に比し第一回豫想の方が大であつた年が十六ヶ年で反對にマイナス即實收高に比し第一回豫想收獲高の方が小さかつた年が三ヶ年で前者の方が後者よりも遙に多い。之に反し第二回豫想收獲高に於ては、實收高より小なる場合(マイナス)が十四ヶ年で、プラスの場合が五ヶ年で、全く第一回豫想の場合と逆になつてゐる。而して實收高に比し第一回、第二回共豫想の方が大なりし年は五ヶ年、小なりし年は三ヶ年、實收に比し第一回が大で第二回が小なりし年が十一ヶ年、この逆で實收に比し第一回が小で第二回が大なりし年は皆無であつた。

第一回豫想を九月二十日現在で調査し、第二回豫想を十月末日現在で調査する制度を大正六年に始めてから、昭和十年の調査迄十九回の實施成績に顧みるに、豫想と實收との開きの方向に上述の如きかたよりのあることを我々は知るのである、念の爲其のかたよりを總括すれば左の通りである。其の一は第一回豫想は第二回豫想よりも其の開きが大きなること、其の二は第一回豫想は實收高よりも大きくなり、逆に第二回豫想は實收高よりも小さくなる傾向のあることである。其の三は第一回豫想が實收高より小さい年は第二回豫想は常に實收高より小さくなつてゐることである。

—(此の章續)—

……作業を終りて……



勝下新田の共同經營作業場

統計模範町村を訪ねて ⑧

調査員努力の結晶が

經濟更生に大役を果す

—— 明朝に伸びゆく諏訪村 ——

一 記者

銚田通へのバスに揺れながら、東海岸の模範、諏訪村を斯うかあゝかと心に描いて、水戸から約一時間ばかり行くと、車掌君が「こゝが縦山の役場です」といつて静かな道ばたにおろしてくれた、成るほど駐在所と並んで、ほこりに赤茶けた掲示板が立つてゐる。

『あゝなるほど……』

と、もう一度肯いて這入つて行くと、古い行屋みたいな家の角にぶつかつた其の角に村農會と穀物検査員駐在所の看板はかゝつてゐるけれど玄關がない、家の中はひっそりと空家のやうだ。

『これは違つたかな……』

淡い疑念を抱きながら、胡論に見廻はすと玄關はずつと奥の方に、そつほを向いてゐる、其の玄關に助役酒井さんのニコ／＼顔がポツカ

りと浮いてゐた。

實を申すと私は、昨夏酒井さんとは千葉縣下の優良町村視察を共にし、舊知の間ではあつたが、諏訪村が模範だとか優良だとかは寡聞にして聞いてゐなかつた。今眼のあたりに古ぼけた役場の玄關に立つて、さて此の中にどれ程の珠玉が包まれてゐるのか、どれ程の錦が藏されてゐるのか、一寸見當がつき兼ねたのであつた。

酒井さんと卓を圍んで、施設經營のあとを纏ね、抱負經綸を聽くに及んで敬虔の念禁じ得ざるものがあつた。

我が統計協會總裁安藤知事閣下も、不日親しくこの村を、この廢屋に似たる役場を視察するの豫定にあるとか聞くが、ほんたうに凡てが充實し、克く届き、克く整へ、見たところの廳舎などは全く反對に、全村民舉つて潑瀾たる働きを見せ、村の更生のために、村の興隆のために眞剣に盡してゐる

生々發展期して待つ

べきものがあらう。

以下順を追うて此の村の働き振りを紹介することゝするが私が此處を訪問して先づ第一に、非常に力強く感じたのは助役酒井さんの口から漏れた其の第一聲である。

『此の村は昭和九年に經濟更生特別指定村となりまして昨年からは計畫を實施してゐますが、此の計畫を立てるに當り基

本調査に一番役立つたのは統計です、統計が完全に出来てゐなかつたら經濟更生の計畫など立てられるものぢやありません、幸ひ此處には大正十年頃からの各種統計が、きちんとしてゐましたので既往に遡つてドン／＼計畫を進めました、われ／＼の統計が今日かうして自分の村の更生に役立つとは考へませんでした』

斯ういつて酒井さんは御自分が長い間苦心し努力して作りあげた統計が直接我が村の更生の基本を爲し得たのを心から喜ばれたのであつた。

然らば諏訪村が現に實施してゐるところの經濟更生計畫とは如何なるものであるか、又この計畫を立てるのに統計が如何様に役立つたか。

諏訪村は鹿島郡の東北部に位し、大貫方面から行くと銚田のすぐ手前、街道筋に沿つてゐる、東方一帯太平洋に面し、縦山、安房、柏熊、柏熊新田、瀧濱、勝下、勝下新田の七大字より成り現在の戸數七百四十八戸、人口三千九百九十七人である、東方長く海を控へてゐるが漁業としては農の片手間に鱒を獲る位で大部分は農業である、民風質朴で

愛郷愛村の念厚く

農事に精勵してゐるが、昔から水田極めて少く、明治三十

八年頃の統計によると水田百三十五町一反、畑四百二十一町四反で、山林が千二百十六町九反歩もあつた、山ばかりで耕地が斯くも少くは農村の經營は到底圓滑にいくべき筈がないといふ處に目醒めて盛んに開墾を行ひ、陸稻並に大小麥の耕作を奨励し、昭和十年には水田百三十二町九反、畑九百十六町六反、山林七百七十八町歩となつた、主要生産物は米、大小麥、大豆、菜種、甘藷、繭等で年産二十三萬餘圓に達し養蠶なども著るしく發達して一年五六萬の収入となり、甘藷(干燥芋を含む)の耕作また大いに進みて各農家で作るやうになつたといつても年産五千四百餘圓位にしかならなかつた。しかも引續いた繭安に養蠶は段々氣乗り薄くなる、近年、年毎に加はる天候の異變に水陸共に米作は思はしくなく、漁業は鱒ばかりだから精々とれた處で年産一萬二千圓程度のものだ、況んや普通の農作物では、不幸にして一朝不順な天候に遇はうものなら長い間の勤勞は減茶々々にされてしまふ、あとへ残るのは肥料代だ、こんなことぢや何時になつてもうたつが上らない、研究に研究を重ねた結果、山林原野は幾らでもあるのだから之れを開拓して土地利用の合理化をはかり、主要農産物の増殖を目指すの外はないといふことになつて、昭和六年頃から——經濟更生指定に先立つこと三四年前、早くも現在の更生計畫と同様の方針を立て陸稻、大小麥、甘藷の増殖を眼目に開墾を奨励した。

を栽培目的に村全体で二十四町四反歩を五ヶ年間に切り拓き甘藷は反當り六百貫を目標に奨励を豫定したのであつたが、此の豫定は初年度に於て殆んど完成し、尙ほ二ヶ年二十町歩位の割合で開拓されつゝある。

更にこれを戸數人口の上から観ると、明治三十八年には戸數四百九十戸、人口二千八百七十六人であつたものが昭和六年には七百一戸、三千八百七人に増し、昭和十年には七百四十八戸、三千九百九十七人となつてゐる、近年農村の疲弊甚だしく、萬一の僥倖を夢みて都會に出奔するもの次第に其の數を増し、農村は荒廢するばかりであるのに、この諏訪村が如何に愛郷愛村の念に富んでゐるとはいへ、斯の如き年々人口戸數の増加を示してゐるのは誠に異とすべきである。

此の外經濟更生の計畫として自給肥料の増産、自家用醬油



【寫眞】 前列右から菅谷調査員・酒井助役・石崎書記
▲後列左から白井書記・田口收入役・其他

開墾直後には陸稻が一番適當するので第一義的に計畫したのであつたが天候の影響する處頗る多く、更に研究を遂げた結果、如何なる旱天にも、如何なる風雨にも、又冷氣にも大して影響なく、しかも地味に最もよく適してゐるのは甘藷だ

殊に甘藷は一般食料

として賞味されるばかりでなく、澱粉材料として需用益々多きを加へ、間作にて事足り幾多有利なる條件を具備するので、之を以て村の重要作物たらしむべく奨励したので、桑園をおこして甘藷畑となし、或ひは陸稻を廢して甘藷に替へるもの、新たに山林を拓いて畑地となすもの等々著るしく増加し、甘藷の耕作昭和七年には二百八十町に過ぎなかつたが昭和十年には五百町歩を越ゆるにいたり、一躍して十二萬四千圓の收穫を示し、更に本年の如きは前年に比し百町歩からの増加であるといはれる。

この甘藷は貯藏法等も大いに研究され、あと二ヶ月もすれば新しいものが出來るといふ今日尙ほ生のまゝにて盛んに移出してゐるが、少しも傷みなどは無い、又之に加工し干燥いもとして賣出し相當の聲價をあげてゐる、かくして甘藷の栽培が盛んになつて以來、村民各戸に貯金が出来、従つて滞納等も全く跡を絶つに至つたさうである。まことに甘藷様々だ。而して更生計畫による開墾は甘藷と陸稻(開墾當初の作付)

醸造、納税完納奨励、經濟更生簿記入勳行、農家組合設立奨励、屋外堆肥積込所奨励、共同秤の購入、園藝農産物集荷所設置、肥料共同購入、農作道修繕、コンクリート灰置場設置生産物の共同出荷及び販賣、組合懇談會、現物貯金、豚販賣

貯金、年始廻禮廢止、除隊兵士産物廢止、出兵家族手傳ひ、祭禮の統一等々をあげ、一方には村民全體が教師となり又生徒となつて學校教育並に各種團體の特質を伸展せしむると共に協調聯絡して其の活動を統制し自治の發達産業の振興を圖り、且つ村民の知徳を涵養して以て郷土愛を基調とする和やかなる寮團氣のうちに理想郷を建設するといふ建前のもとに

全村教育を施行し

經濟更生計畫と相俟つて、全村民打つて一丸となり、眞剣によき村、輝く郷を作るべく、毎朝青年團員が打ち出す太鼓を

合圖に午前四時一齊に起床、營々として勤務にいそしみ、計畫最初の昭和十年五月一日迄に早くも左の如く實行に入り、實績を挙げた、村當局の努力と學校職員の協同倍和が斯くさせるに大いなる力のあつたことは勿論だが、一つには愛郷愛村の民風も亦與つて力を添へたのである。

諏訪村經濟更生計畫實施後ノ實行事例

- 一、開墾 二十四町四段三畝二十步
- 一、自給肥料ノ増産 七萬八千四百五十貫
- 一、養豚 百七十三頭増
- 一、養兔 三百三十六頭増
- 一、自家用醬油醸造 八十二戸増
- 一、農家組合トシテ實行又ハ計畫シタル事例
 - 一、肥料共同購入
 - 二、自給肥料増産
 - 三、ハシブ豫防用噴霧器設備
 - 四、農作道修繕
 - 五、コンクリート灰置場設置
 - 六、公休日決定
 - 七、灌漑用水路ノ設備
 - 八、甘藷共同販賣
 - 九、自家用醬油醸造並糶製造
 - 一〇、自給肥料二百五十貫増産計畫
 - 一一、甘藷作付各戸一段歩増
 - 一二、甘藷切干増産計畫
 - 一三、開墾事業ヲ起シ共同耕作地ヲ經營シ積立金ヲ作り肥料共同購入ヲナス
 - 一四、家畜ノ獎勵
 - 一五、生産物ノ共同出荷
 - 一六、厩肥増産、桑園間作ニ青
 - 一七、糞尿灰鶏糞處理
 - 刈大豆綠肥栽培

尙ほこの外にも各部落々々で、それ／＼各様の特殊な事業を行つてゐるが、大字勝下新田の農家組合では組合員二十二戸が共同努力奉仕で三町三反歩の松山を開墾して陸稻を仕立て、肥料代及び種子代を差引いた残りは組合の共同貯金にすることにし、本年初めて播種したが、さすがに精農家達が

農業報國の一念を

凝らした農場だけに隣畝整然として一段の趣きを見せてゐる。(カット参照)

冠婚葬祭——殊に最も至難とされてる婚禮については、先づ婦人方のハツキリした意見を纏めてかゝるのが第一だといふので、部落懇談會にはつとめて婦人方の出席を促し、古來傳はる美俗を傷けず、餘り金をかけずにも笑はれず、式を擧げるにはどうすればいゝか、當局の腹案も示して意見を求めてゐる。葬儀については既に部落母に或ひは葬式貯金を企て、或ひは悔み返しの廢止、飲食の節度等それ／＼定めに従つて改善され、一方には甘藷によつて茲兩三年來思はざる潤ひが出来る、昨年あたりから西瓜の栽培が盛んになつて北海道方面へドシ／＼移出される。更に村を擧げての勤勞があり、克く伸び克く調うて村民の懐る工合も大變よくなり、先頃青年團員が投票函を持ちあるいて負債の無記名投票を行つた處村全體で五十六萬圓の負債に上つたが、貸金(貯金も含

- 一八、品種ノ統一、良品種ノ共同購入、共同販賣
- 一九、甘藷切干共同販賣
- 二〇、月掛貯金
- 二一、共同秤ノ設備
- 二二、一月甘藷二俵ノ現物貯金
- 二三、宅地利用柿苗植栽
- 二四、小麥誘病豫防
- 二五、一戸一圓貯金
- 二六、一戸六十錢貯金
- 二七、肥料共同購入
- 二八、納税完納實行
- 二九、國旗ヲ組合ニテ購入組合員ニ配付
- 三〇、小麥一斗甘藷二俵ノ現物貯金
- 三一、豚賣却ノ際親豚一頭ニ付壹圓仔貯金
- 三二、堆肥共同積込
- 三三、牛馬糞ノ獎勵
- 三四、有畜農業經營
- 三五、産業組合利用
- 三六、開墾
- 三七、甘藷一俵現物貯金
- 三八、一戸年二回一圓ツ、貯金
- 三九、公休日一日十五日ヲ總會並懇談日トス
- 四〇、經濟更生簿ノ無償交付各農家組合(二部宛、青年團(二十部)
- 一、生活改善ナシタル事例
 - 一、時間勵行
 - 二、病氣見舞又ハ徵兵検査見舞廢止
 - 三、自字以外親類ノ死亡者アリタルトキハ兩隣ニテ悔ミ代表ス(兩親ニ限ル)
 - 四、國旗掲揚
 - 五、冠婚葬祭ノ嚴肅費用ノ節約
 - 六、祭禮ヲ年一回ニ改ム
 - 七、軍人送迎會ハ社殿ニテ行フ
 - 八、出兵家族ノ手傳ハ年二回行フ
 - 九、廢物利用
 - 一〇、生活改善ヲ主婦ニ徹底
 - 一一、年始廻禮ヲ廢シ一月一日總會並ニ新年會ヲ開ク
 - 一二、祭禮ヲ年二回ニ改ム
 - 一三、舊慣ヲ改メ部落ヲ分離單獨農家組合組織(二組合)西勝下瀧濱新田

む)の方も五十萬圓を超えてゐるから結局貸借は相殺されるだらうといはれる。青年達は此の調査の結果をみて一段と奮ひ起ち「速かに負債を償却せよ」と物の日も休まずにセツセと働いてゐる。

斯くして良き村、良き郷を目指して起ちあがるに至つた基本は何であつたか、又起ちあがつた中堅人物は誰々であつたかといふと、それこそ即ち我等の統計であり、統計調査員諸君であつた。

何事でも目標を付けるのには基本調査がなければ駄目だ。助役の酒井守衛さんは村長白井精氏先頃病退して以來、村長代理として一村を管理してをられるが、同氏は明治卅二年四月役場書記を拜命して以來、中途數年浦和地方裁判所に勤務しただけで今日に至るまで前後實に三十餘年、銳意自治の伸展に努め、現に兵事、庶務、統計、戸籍から法規の整理迄一手に引受けて朝から晩迄目の廻るやうな忙しさである、就中統計事務については、殊な法規もなく調査の極めて幼稚な時代から、謄寫版刷りの用紙を工風したりして獨創的手腕を現はし、昭和三年二月森岡知事時代に縣表彰の光榮に浴した現に鹿島郡統計協會支部長の要職にあるが、さうした古い時代の記録が今も整然と整へ揃うてゐる、それが今度、村の經濟更生に大きな役割をつとめたのである、左に

基本調査の内容二二

を掲げてみる。これ皆調査員諸君が努力された累年の統計の現はれてある。

(イ) 戸数増減ノ状況

表中△印ハ減

種目	現在	十年前	増減
總戸数	七〇七	五八四	一二三
總人口	三、八八二	三、二〇五	六七七
内譯	一、九〇九	一、六六七	二四二
男	一、九七三	一、五三八	四三五
女	五八五	五八五	—
職業別戸数			
種目	現戸数	十年前戸数	増減
農林業	六七七	五五四	一二三
水産業	—	—	—
工業	—	—	—
商業	九	一八	△九
其他	二一	一一	一〇
其計	七〇七	五八四	一二三

(ハ) 自作小作別戸数

種目	現戸数	十年前戸数	増減
自作	—	—	—
小作	—	—	—
計	—	—	—

種目	甲	乙	丙
地主兼自作	七	六	一
地主自作	七	六	一
自作兼小作	九七	四七	五〇
自作小作	四三五	三四〇	九五
計	一三一	一五五	△二〇
計	六七七	五五四	一二三

(イ) 經常費(一戸當)

種目	甲	乙	丙
被服費	一二二圓	五四圓	二一圓
飲食費	三四五圓	二五八圓	一八〇圓
住居費	七三圓	三六圓	一八圓
教育費	二〇三圓	二二圓	一六圓
衛生費	一六圓	一二圓	一一圓
交際費	一二三圓	五五圓	二一圓
娛樂費	一五圓	八圓	二圓
嗜好費	八九圓	三七圓	六圓
諸寄附	五二圓	一七圓	五圓
其他	七三圓	二五圓	五圓
計	一、一〇圓	五三四圓	二八五圓

(ロ) 臨時費

口の三氏は村會議員を勧め、一區の菅谷、四區の方波見、十區の中山、十一區の石崎、十六區の米川諸氏は區長である。是等調査員諸君は主任酒井助役の

よき手となりよき足

となりて多年一日の如く統計事務にたつきはり、前記の如く經濟更生指定村として理想郷を目指して起つにあつても、本業たる農事の傍ら、また極めて面倒なる統計調査の傍ら、基本調査その他に餘力を添へ、調査員としての最も輝やかしい、意義ある仕事を仕はしたのである。

本村は田の面積が百三十二町八反歩で千七百十二筆、畑が九百二十四町七反歩で四千七百二十二筆もあるのだから、調査員諸君の擔當は多いものは一人で田が四十二町六反歩、五百八十三筆、畑が百三十一町五反歩、六百六筆、最も少い人で田が二畝一筆、畑が二町七反歩二百五十二筆、之を平均すると一人の擔當田が七町四反、九十五筆、畑が五十一町四反二百六十一筆に當る、斯くも細かく、斯くも大きな調査區を割當てられながら別に不平などいふものもなく、期日通りに必ず調査を進めてゐる、その手當はといふと米生産手當まで加へて年一人二十圓である。それで季節々々に開く調査員會議には萬障差繰つて全員出席し、番茶をすよりながら統計の改善について互に意見の交換を行つてゐる。

ある。

本村の統計調査員は十八區十八名で氏名年齢は左の如くである。

種目	甲	乙	丙
婚禮費(嫁)	八〇〇圓	三六三圓	一一四圓
入營費	四六七圓	三一三圓	七六圓
退營費	七〇圓	二五圓	二〇圓
紐解祝費	七五圓	二五圓	二一圓
葬儀費	六八圓	二五圓	一一圓
佛事費	二〇四圓	一二五圓	三九圓
計	四六圓	一七圓	一〇圓
合計	一、七三〇圓	八九三圓	二九一圓
合計	二、八四〇圓	一、四二七圓	五七六圓

主任の酒井さんは折角調査員諸君が努力の結晶をたゞ縣に報告するだけでは勿体ない、何か利用の方法をと調査員共々研究の上毎月村報を發行して村の統計を村民に知らしめ、之を纏めたものを村勢一覽として隔年發行し、部落々々では年一回部落概要と稱するものを發行し何れも無代で各家庭に配つてゐる。

經濟更生村に指定さるゝや、之が計畫樹立につき基本調査に利用し大役を勤めたことは上述の通りであつて、更に部落懇談會及び各種団体の集合を利用して統計に基く村勢を理解せしめ、一面小學校と完全なる提携聯絡をとり、是等の發行物等は一切學校が引受けて調製し、學童をして各家庭に配布させるのは勿論

進んで教壇に呼びかけ

一、教科の郷土化、實際化の資料として
 二、他地域、他地方と郷土との比較研究資料として
 三、地理科の基礎養成資料として
 つとめて村の統計を應用せしめ、又一方には東京其の他各方面に出て働いてゐる人達にも及ぼし、苟くも村に常住する者と否とを問はず、諏訪村民である者には統計を以て郷土の眞の姿を認識せしめ、郷土愛の精神をシカと植付けて強固なる祖國愛に及ぼしめ、郷土に對する行政、教育、産業等各般に

亘り將來如何にせば生々發展の域に進むべきかの、郷土の將來に對する覺悟と研究の資料たらしめようと努力してゐる。

偶々役場に來合せた第二區縦山の調査員菅谷精一氏は『考へてみますと長い間には随分ツライこともありました。さうかといつて大した仕事をして來たとも思ひませんでしたが、それが最近經濟更生に役立つたり、いろ／＼な方面に利用されますのを聞くと、何とも言ひない快感を覺えます、同時に、かうなつてはウカ／＼してはゐられない、一層完全な統計を作りあげて村のため、また國のためにお盡し／＼なければ相濟まぬといふ氣持ちになりました』

と沁々話されたが、めい／＼の努力が直接村の更生に役立つとなつては菅谷氏ばかりでなく各調査員諸君が同様に感ずる處のプライドであり、同時にレゾルションではあるまいか尚ほ本村は村長代理酒井助役の外に收入役田口清三氏、書記白井嘉重、杉本泰之介、石崎一郎の諸氏がある、石崎氏は在郷軍人分會長をも兼ね快調な青年で、酒井さん多忙の時には統計の方のお手傳もやつてゐる。

小學校長田崎蔚氏は師範學校に在る頃から文學を研究し、曾ては横瀬夜雨に師事し、木星同人として知られた、諏訪村更生の一ツトセは田崎校長の傑作で、村の寄合には老若男女を問はず、聲高らかに此の歌を歌つて耀やく更生の意氣を示すのである。

鑛山地帯の發展で

思はぬ困難する調査員

激しい土地の移動と戸口の増加

一ヶ年の増加人口四千人

配を振つてゐた。

日立は今更喋々するまでもなく、日立鑛山の躍進と、日立製作所の底知れぬ膨脹とにより夢想だもせぬ一大鑛工業地帯を現出し、最初は彼の雄大なる煙突と共に日本一を誇り、更に東洋に覇を稱し、現に世界有數の工業都市として指を屈せられるに至つた。

昨今隣接助川を併せて市制施行をも考へられてゐる、人口から見ると、施設から見るも、將たまた經濟的資源、都市的形態等から考へて、疾うの昔に斯くある



町立日たし影撮らか機行飛

待たれた日食の日である。「朝のうちは時々小雨があるかも知れませんが午頃からだん／＼良くなつて晴れ間を見せるであらう」ラデオの放送を、よもやけふばかりは天文様に違算はあるまいとカメラを片手にステッキ一本の輕装で鑛都日立を訪ねた。

天無情！役場へ着く頃から霧雨が霽のやうにかゝつて鑛山も海も一色にぼけてゐる、がつかりせざるを得なかつた。

此の日、町長大窪喜太郎氏は町村長會があるとかで不在、助役根本篤喜氏が采

べきものであつたのではあるまいか。試みに明治四十年以後現在に至る戸口の累加ぶりを表示すると左の如き驚く可き數字を現はし、なんと小學兒童だけでも本年五月現在で七千一人もある。

驚く可き人口増加

年次	戸數	人口	
		男	女
明治四十年	四〇六	一、三三六	二、五七九
大正元年	六四六	二、四四五	三、九〇二
大正五年	一、七六〇	五、八三三	九、八二九
大正十年	四、七三六	一〇、三三三	二〇、二〇八
昭和元年	五、三三四	一三、〇七三	二四、六三三
昭和五年	五、六六七	一三、九三三	二七、五八〇
昭和九年	五、八七七	一四、六四九	三〇、四四六
昭和十年	六、三三七	一六、四三二	三三、四九六

日立鑛山は、明治三十四年赤澤銅山と稱して創業されたが萎靡振はず、將に廢鑛の悲境に陥らんとしたのを三十八年久原房之助氏の手に移り、村の名を取つて日立鑛山と改め、經營宜しきを得て俄然活況を呈し、四十二年附屬事業として機械修繕工場を併設した、是れ今日の日立製作所のはじまりで鑛山と共に旭日昇天の勢ひで躍進又躍進、製作所は遂に分離

めて間もない明治四十年頃から戸數も人口も逐年増加して昭和九年と昭和十年十月の國勢調査とでは約一年にして戸數が五百、人口が四千からも殖えてゐる、全く驚異的な發展である。

統計調査員の苦心

然らば是等異狀なる戸口増加の波は何處へ押しに行くかとへば、大部分は大字宮田である。

日立町は滑川、宮田の二大字から成つてゐる。鑛山地帯を宮田といひ、農村部落を滑川と稱してゐるが、宮田は全く鑛山の施設圏内にはいつてしまつて鑛山の發展につれ、製作所の膨脹につれ、種々なる附屬工場が建築される、役員住宅とか従業員住宅とか「ドーン」建設されて殆んど耕地を剩さずそれでも足りないで滑川方面にも及びつゝある。

斯くして耕地が宅地となり、工場地となり、日に土地の移動甚だしく、そこで一番困難を感じるのには統計調査員諸君で、

『この調査員は農の傍らやるなんて云ふのでは容易ぢやありません』

と歎息を漏らさせるのも無理からぬ事と思はれる。

統計調査區は昨年春迄は町を九區に分けてゐたが東西七、二軒、南北三、八軒總面積一六・三九方軒もあるので、多い

獨立し、日立鑛山と共に天下に名を成し、いはゆる軍需工業を以ていよ／＼益々盛大を極め、助川停車場附近に嶄新にして精巧なる化學の粹を蒐めた一大工場を建設し、常磐沿線に一異彩を放つに至つた。

しかも此の鑛山と工場との殷盛は地元だけに、日立町に最も甚大なる好影響を及ぼし、現在同町六千餘の戸數のうち鑛山か工場に勤めを持たぬ家は殆んど無いと言つてもいい位で、他の農村等には考へてもみられぬ不斷の收入に潤ふばかりか、時折り思ひ掛けぬポーナヌに郷人をして歡喜の涙にむせばしめるのである。それが雷に勤めを鑛山工場に持つものばかりではない、一般農民にありても或ひは大根であるとか、トマトであるとか、キャベツであるとか、折々の食料品を鑛山地帯に賣り出して、幾ら脊負ひ出しても脊負ひ出しても賣れ間に合はぬ程に恵まれてゐる。

此の景氣——軍需工業景氣が何時迄續くかといふことは能く聞かされる問題だが、ほのかに聞くとところによれば、謂ふ所の軍需工業などは今、直ちに跡を絶たれても鑛山は永世不變の寶を地底に抱藏してゐる、製作所は茲十年間一つの注文だになくとも仕事に困らぬだけの豊富なる注文が既に山積してゐるといふことだ、誠に豪勢なもので今日の有様でいくと、どれほど膨らまるのか判定がつかない。

前掲の戸口累加表に示す如く、久原氏が鑛山を經營しはじめるの一人であるが六十町歩からも擔當するといふ無理があつたから昨年四月十區に改正した、調査員の擔當區順に氏名年齢を左に掲げる。

- 1 沼田 晴君(四一)
- 2 遠藤 軍藏君(四三)
- 3 大和田源 男君(三七)
- 4 水庭 源美君(三五)
- 5 小澤 政男君(三三)
- 6 沼田 義光君(四七)
- 7 福地 千代雄君(五三)
- 8 大谷 戦治君(五五)
- 9 大内 健司君(三四)
- 10 根本 元次郎君(四一)

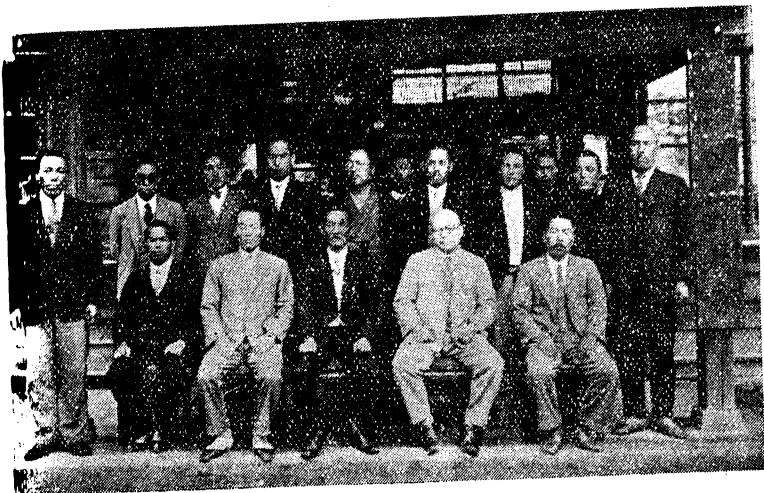
是等の諸君は古きは大正十三年頃から、其の他も大抵は七八年から十年あたりの勤続者である、町の統計主任大内健司氏は役場書記として大日立の兵事々務をひとり手に處理しながら面倒な統計事務にたつさはり、寸暇なき身を更に自ら調査員となつて第九調査區を擔當し、役場への往復に、現地を見たり、退廳後から夜へかけて對人、現地の調査を行つたり勤務の傍ら此の大業に従ふ調査員諸君と共に親しく調査上の辛酸を嘗め艱を郷黨に垂れてゐる。

さて話は前にもとるが昨年度から調査區を十區に擴張したとはいへ、それでも一調査員の擔當區域は多きは四十四町、少きも十町を下らず、平均二十四町になつてゐる、かゞ加へて土地の移動が激しく夕べに視てあるいた土地が翌くる日には他人の手に移つて畑地が宅地に變るといふ始末だから、調査員はちつともぢつとしちやわられない、モ一つは總ての

作物が數年來鑛山の發展に伴うて全く其の趣を異にし、會てトマトもあるといつたやうに、間がな隙がな種々雑多なものが栽培してある、そればかりならまだしも、大根とか漬菜とか、さうした切りかへしの早いものは、蒔いては賣り蒔いては賣り、何回となく作付けし、何回となく繰りかへしてゐるのだから實測反別に比して作付反別は常に非常に多くなつてゐて、それで一定してゐない、擔當の調査員は年がら年中現地を視てゐなければならぬ、しかも作付する度に反別が違つてくるから目測に非常な困難を感じるのである、普通なれば是等蔬菜類の測定は足歩で計算してゐるのだが、中には一本の畦に五種類位作付けしてある、其の隣りの畦には又二種類も作つてある、それが春に種を蒔いて夏に收穫すると秋に收穫するとかいふのでなくて、これ位に伸びたな、賣れるとなればドン／＼賣物にしてしまふのだから調査員は泣かされる。

好景氣と蔬菜類

處が其の蔬菜たるや甚だ調査が面倒なのである、例へば夏期調査に屬する作物にしても、いはゆる其他の蔬菜類が多様多様で一枚の畑に幾種類あるか數へ切れぬ程いろんなものが作つてある、鑛山へ持つて行けばどんなものでも大抵のものは買つてくれるのだから成るべく種類の異つた品を澤山持つて行つて相手方を喜ばせる商略上の掛引が、勢ひ作物の上に現はれてくる、猫額大の畑地であつても、向うの隅の方には大根が作付けてある、其の次には菜がある、葱も植ゑてある、炭碗豆も



〔寫眞〕前列右から二人目佐藤收入役、次は根本助役、次は大内統計主任其他は役場員

それでも調査員諸君は、其の面倒を

面倒ともせず、常によく耕地を見廻り手落ちなく用意し、集計期になると受持区内を小票を持つて書入れにまる四日、集計は毎夜十二時頃迄努力して六晩位かゝるさうである、米生産の時には調査員全部を四日間招集し、役場において集計することにしてゐる。

坪刈調査は坪刈箇所を撰定してから、刈つて乾して、磨すにかけて、玄米にする迄手を盡して地主へ十錢、調査員が十錢の手數料ときめておく、若し調査員が自分の所有地内から撰定すれば併せて一箇所二十錢となるわけである。

優良町村視察して發奮

主任大内氏は前に述べた如く統計調査員として又統計主任として昭和三年以來銳意統計の完璧を目ざして努力し、縣規則の示す處に従つて種々工夫を凝らし、斯うしたら、あゝしたらと研究を積んで行くうちに實際に當つていろ／＼と疑問が起きて來たりして、ハタと行き詰ることが往々あつた。これではいかんと考へた末、千葉縣下の統計が頗る優れてゐると聞いて昭和六年頃調査員と共に千葉縣津ノ宮を視察した、そこで先づ驚いたのは小票式でキチンと整つた書類だ。

『成る程かう出来てゐるべいたいしたものだ』
調査員一同心から感動して、今迄自分達がやつてゐたやうなことでは恥かしくてお話にならぬ、もつと／＼大いに徹底

しなければ駄目だとそれ／＼發奮を誓ひ、大いなる効果を齎らして歸郷した。

大内主任もまた日頃の解けやらぬ謎がはじめて解けたやうな氣もするし、種々新たな発見を土産に歸つて來る早々、新知識を傾けて畫策これつとめ、昭和七年には小票と合致するやうな地番別の略圖を作つて各調査員に二枚づゝ渡して調査の便宜を助けるなど到れり盡せるものがあつた。

一方には調査員諸君の自奮自勵があり、一面主任者の熱烈なこの指導斡旋が伴つて成績はめき／＼とあがつて來る、今春紀元節には調査員沼田晴氏が統計功勞者として縣の表彰に浴し、伸び行く大日立の統計のために氣を吐くに至つたが、之れを切つかけに調査員一同更に大いなる表彰、更に大いなる榮譽を目標に献身的努力を續けてゐる。

能く整つた簿冊

筆者が町役場を訪問すると町長室に持ち込まれたものは各字毎に一冊の書物のやうに綴られた各耕作者別の小票である上には字々の集計が添へてある、『作付反別調査原簿』もまたまことに体裁よく作られて、之を繕けば大字、小字、地番、地目さては耕作者の氏名から自作か小作かまで一目瞭然、モ一つは外ではあまり見かけぬ「統計調査員出席簿」だ、前半は普通郵便で、後半には調査員の氏名を掲げ出缺を明かにす

る欄がある、前の方には調査員會の月日、會議用件を記し、後の方には名前の上の欄内に出席は斜線を引き欠席は空欄にしてあるから、誰それは何月何日何の集りには來なかつたとか誰々は皆勤だとか勤怠直ちに明かになる。

斯うしたことは極めて微小なる問題ではあるが、我々統計にたつさはる者の要諦は時を違へず、正しく、規律的なるにある、此の意味から先づ自分を正しく規律的ならしむることが第一で、自分の一舉手、一投足、皆これ統計調査的の氣持ちでなければならぬ。小さいことから統計に物言はせようとする日立のこの出席簿は大變い、思付きではあるまいか。

各調査員に對し調査材料を保存し、整理に便ならしむるため大きな本箱を壹個つゝ配つておく、これなども他には餘り見られないことであらう。

町長大窪喜太郎氏は根本敬松氏の後を襲うて現職に就き重任して現在に及べるが、重厚和順ひたすら町治の伸展に力を致し、助川との合併、市制施行等についても能く利害得失を考へ、町のために將たまた四萬町民のために計つてゐる、助役根本篤喜氏は教育界から畑違ひの自治體にはいつたが、氏もまた助役たること二期、町會議員をも兼ね、町長を補佐して事績を擧げてゐる、佐藤收入役は大和田重實氏に代つて最近就任したばかりだが、其他の吏員皆能く献身的に努力し、協陸和衷の實をみせてゐる。

太郎、町會議員眞弓正治郎、同古川文三の三氏委員となり、着々準備を進めてゐるが、鑛山は助川驛と大雄院事務所との間に専用電氣鐵道を敷設し、鑛石及び各種貨物の運搬、従業員の便乘に供し、本山には採鑛事務所がある、茲の鑛山より産出する銅鑛石の外、日本鑛業株式會社經營の北海道、東北關東及び本州中部地方に散在する鑛山の鑛石を集中し、且つ是等の地方より産出する金銀鑛及び銅鑛を買鑛して熔鍊してゐる。

日立製作所日立工場は日立鑛山の一修繕工場から獨立して

是等町當局は勿論、町會議員にありても、皆よく統計の重要なを理解し、統計調査員の手當の如きも年二十四圓に米生産調査に別に三圓、合せて二十七圓つゝ支給されてゐる、参考迄に十一年度豫算に現はれた此の町の統計費を抄録してみよう。

- 一、統計費 四四三圓
- 内譯種目
 - 一、雜給 二九〇圓
 - 調査員手當十人一月月額二圓此金二百四十圓、旅費五十圓
 - 二、需要費 二九圓
 - 諸用紙代二十二圓雜誌代七圓
 - 三、雜費 三〇圓
 - 縣統計協會負擔金六圓、研究會費十圓、調査員會議費十四圓
 - 四、米生産統計調査費 九四圓
 - 調査員十人一年額三圓此金三十圓、坪刈費用辦償額百二十ヶ所、一ヶ所二十錢此金二十四圓、諸用紙五圓、打合會費十五圓
 - 集計費二十圓

日立鑛山と製作所

日立は人も知る如く日立鑛山の發展と日立製作所の膨脹と兩々相俟つて各方面に亘り異狀なる發達を來たし、昭和八年十月都市計畫施行地として内務省から指定され、町長大窪喜

今や資本金二千萬圓の大會社となり、電氣諸機械、器具、蒸氣タービン、蒸氣汽罐、エレベーター及び電線を製作してゐるが従業員約一萬人、その内大學卒業業者が百名、専門學校卒業業者が二百五十名と稱せられる、以て其の陣容の偉大さを窺ふに足る。

此の多幸なる大日立、洋々たる前途を持つ大日立に祝福を饒けて役場の門前に立てば、細雨濛々あたりをこめて日食どころでない、寧ろ無氣味な寮圍氣であつた。

選舉肅正の歌

町村會議員選舉は眞近に迫つて來ました、今度こそ正しい選舉を行つて範を全國に垂れることにたしませう。

- 一ツトセイ 人々心を一致して正しき選舉に進みましよう
- 二ツトセイ 不正な選舉は全廢し理想の投票行はん
- 三ツトセイ 剛き投票したなれば心に苦勞は増すばかり
- 四ツトセイ 欲に迷うて選舉には投票するなよすぞ知れる
- 五ツトセイ 一同國旗を掲揚し神に手を揚げ投票場へ
- 六ツトセイ 昔し忘れて今を忘れ選舉肅正今なるぞ
- 七ツトセイ 何事おいても選舉日は忘れてならぬぞ棄權なく
- 八ツトセイ やさしい物に手を染めて違反にかゝらぬ様にせよ
- 九ツトセイ 國の爲めにと義を立て、身も立つ明るい投票を
- 十トセイ 尊き御國の精神を選舉に現はせ國民よ

- コノ投票を
- コノ違反なく
- コノ増すばかり
- コノ神の告
- コノ安全に
- コノ忘れずに
- コノ國の爲
- コノ注意しな
- コノ投票を
- コノ國民よ

鹿島郡諏訪村

石崎 勘次郎

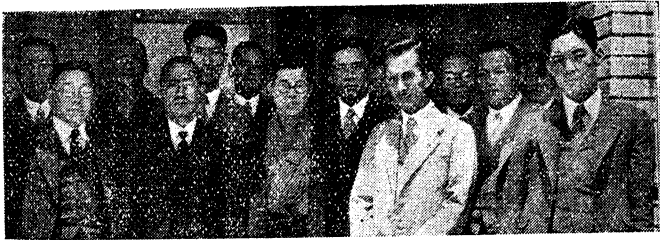
統計の粹を求めて

勝景房總から國都へ

統計協會縣外視察の素描

飯岡榮助

視察員の一行



六月十一日

(第一日)

待望久しかつた統計協會第二回縣外視察も、此の日愈々スタート

をきることになつた。前日來の曇り勝な天候は梅雨時にも拘らず、からつと晴れわたつて誠に絶好の視察日和。車を窓を訪るゝ緑風はしきりに一行の鼻を

うつ。

水戸驛より引率者小林縣屬、水戸市の幾浦君、鹽田村の岡崎君、日立町の大内君、友部驛より西山内村の羽方君石岡驛より武田村の小貫君、土浦驛より七會村の高平君が同乗。取手からは豊岡村の中島君、下館町の田中君と僕が加はつて、車中大いに賑ふ、就中武田村の小貫三郎老雄、例によつて野趣たつぷりな行言葉で、車中を壓するが如くまくしたてゝゐる。

小林屬より視察中の事務分擔が發表

記念撮影をなし、丹野さんの東道で大原町へ向つた。

さて此處で發表するのどうかと思ふが縣廳内で出来たエピソードを一つ外でもない此の日は正門からあがつて裏門から出たと思召せ。時は昭和の御代である。今頃下駄ばきの視察員はあるまい——斯う思つた丹野さん、本千葉驛への時間節約の御厚意から、さつさと裏門へ出てしまつた、ところが裏門とは知らず下駄を探し廻つたのは斯くいふ編纂子だ、御門違ひなんだから下駄などありつこはない。戸惑ひしてやつとこさ見付けて裏門へ辿り着いた時はすでに一行の影すらなく、只しよんぼりと佇むでゐると、丹野さんは迷子やーい、迷子やーいと汗だくで迎へに来て呉れたのだ。發車まで三分ですと云はれて穴もあらばの感に打たれざるを得なかつた。丹野さんにうながされて本千葉驛にやつと着く。きまら悪きにもち／＼してゐる編纂子を見

される。これは命令的であつて絶対に否むを許さんとのキツイ御達。溢々引受けざるを得ないわけだが、誰のプランかさては恨めし。明朗な副團長や各幹事は打つてつけのはまり役だのに然るに何ぞや、斯く申す拙者に編纂の係りとは聊かと云へたいが、聊か飛び超えて大々の不適任であつて、かなり心臓の強い男も全く顔負けの體。如夢さんにさへ來て戴けたならばと、恨んでもみたが追ツつきさうもない。

つけるや否や、御口の悪い小林さん『編輯長の迷子は傑作だつたね』言、未だ終らざるにどつとあがる喊聲。益々

蘇我から房總東線により、目指す大原町に着いたのは豫定の如く午後一時四十八分、役場は實に堂々たる廳舎だ布留川統計主任さんに迎へられ樓上の會議室に入り、同氏の抱く統計所感をき、その氣魄、その熱誠に一行の魂はゆさぶらるゝ程感激を覚えざるを得なかつた。小票、調査原簿、耕地圖、米生産統計に關する一切の書類を、一行は十二分に視察を遂げた。算盤に新工夫を凝らしたり、實務用の肩掛箸木をつくつたり、また調査員手當を年打切りにせず、出勤日當として一人當り年七十余圓も支出するといふ素ばらしのお話である、町長初め町議等に至るまで統計に對する正しく温い理解を持つことには心から感服させられた。大原驛で千葉縣協會の丹野さんにお別れ

斯うしたいきさつはとおかまへなく柏驛からガソリンカーに移されて揺れるはく。流石の明朗小貫さんの熱辯も耳に入らぬ。柏から柴崎村の油原君がああ堂々たる雄姿を我一行に加へた。

車外の風景は至つて平凡、たゞ高柳あたりの松林が一寸目に留まつた位のものである。

船橋から千葉までは、これはまた素晴らしい乗心地のよい省線電車だ。千葉驛から自動車で千葉縣廳正門前へゴールイン。先着の長田村加藤君、息栖村大塚君と落ちあひ、千葉縣統計協會の丹野氏の案内で一行は應接室に通された。今副團長さんが御不在とあつて主任屬萩原さんが同縣の産業統計の概要を説明して呉れた、流石に統計の御本山だけに、一言一句一行の胸を打つものがあつた。正に天來の響きとでも云ふのであらう。サトビスして下さつた中食に腹をこしらへて屋上に登り、

して、一行は再び車中の人となつた。
このあたりから車窓の眺めは實に素的だ、所謂外房の勝景をいやと云ふ程満喫する事が出来、一行の心を潤し魂の俗塵を洗ふこと限りなし。やがて小湊に着く。

直ちに妙の浦を船で見物。投げ込まれた餌にありつかんとして、波間に躍動する赤鯛黒鯛。實に壯觀。船中唯一人のエトランゼーとも云ふ可き日蓮信者の老婆、躍る鯛を眺めて御題目を口ずさみつゝ『ありがたい、ありがたい』との連唱。のほゝんな視察子一行との信心深い老婆、何と云ふ興深いコントラストであるであらう。

あの鎌倉時代に、一天四海に日蓮の妙法を施くべく敢然として立つた佛教界の異端者立正大師の誕生寺に參詣する。實に壯大なる堂宇だ。大師の幼像は、物凄くいばかりに茂る老木のベツクで一しほ難有さを増す。信心氣のうすい游子にも何かしら胸迫るあるものがある。

あつた。所謂エクスタシーに浸つたのであるかも知れない。山門を背景にしてまだ一つパチリ。

小湊から再び列車にて一路鴨川行。海上に夕闇迫る頃、番頭の案内で吉田屋旅館に旅装をとく。旅の疲れを流し晩酌一本に陶然として酔つた氣持はまさに一夜大名か。食後さうしたほろ酔氣分で行鴨川町の散策に浩然の氣を養ひ十時びつたり一同旅館に歸り寝についたのは流石に茨城健兒だ。日頃の訓練の程もしのばれて奥床しいといふところである。

六月十二日 (第二日)

波の音に夢破られて四時に起床。すでに宿の女中達は戸をあけてゐる、早立ちの客でもあるのであらう。

海岸の小山から太陽が一寸のぞき初める、まだ明けきらぬあたりに曉の光が柔かにさす、漁船が二つ三つ現れて一層美しさを加へ、まさに一枚の油畫

の如き素晴らしい眺望だ。渚を素足でふらつく氣持も亦格別の味ひである、日立の大内君は渚に遊ぶ犬ころを二三疋、口笛たくみに引寄せて宿まで連れてきたものゝ、一片の「ビスケット」にすらありつけない犬共である、不平だら／＼で歸つて行つた。宿では復命係の岡崎さんがさかんに材料の整理をやつてゐた。責任感の強い同氏に感謝の意を表せざるを得なかつた、朝食をすまして自動車で田原村へ向ふ。

八時すこし前役場着、川名統計主任さんの案内で直ちに樓上へ。歴代の村長達の肖像がかゝつてある會議室に入り、鈴木村長さんの挨拶に次いで主任の方が統計に關する感想を述べられるきび／＼した口調、熱誠溢るばかりの眞剣味は、一行の脳裡にいやと云ふ程きざみつけられる。總べての書類、小票、耕地圖共に到れり盡せり、あまりの立派さに唯々驚異の眼を見張らざるを得なかつた。

殊に統計調査員三名が我等一行のために、猫の手でも借りたい程のこの繁農期に、わざ／＼全材料を持參し、説明の役に當つて呉れたのみならず、その上貴い體験を語つて貰ふ事が出来たのは、錦上更に花を添へたともいひよう。主任の熱誠、整然たる事務の處理巧みなる統計活用の圖案等々に感激すると共に、より以上感動させられたのは調査員各位の、血みどろな涙ぐましい努力だつた。

一例を申上ぐるならば第六區統計調査員太田和敬之君の活動振りだ。過般農林大臣に選奨された時の事績が君の全人格を證明してゐるものと思ふ。參考の爲全文を掲げてみたい。

事績

太田和敬之氏

大正十三年一月擧げられて田原村統計調査員となり、爾來専心調査の正確と迅速とを期し、曾て報告期限を愆りたる事なし。擔任調査區は相

當宏大なる區域に涉り、殊に他調査區との入會關係頗る錯綜し調査上甚だ困難なるに拘らず能く順序を定め不斷の努力を以て之が完全なる調査を遂行しつゝあり。殊に米生産調査及一般農産物調査上最も肝要なる耕地に付ては良く之を究め、耕地異動整理簿を備へて異動を明確ならしめ且つ率先十數日を費して調査用地圖を作成し、其他各種調査資料或は實査票等を調製して實地踏査を怠らず以て調査の完璧を期し、加之村統計事務の改善向上に意を注ぎ調査員更迭等のため遅延の調査區に對しては進んで之が應援を爲すを例とせり。尙調査材料及文書保存整理に意を用ゐる將來の參考に資する等其の用意周到にして、一面又區民の統計調査に對する理解薄く調査上不便尠なからざりしを認め統計の利用、統計思想の普及に留意し昭和二年より例年區勢一斑を印刷して毎戸に配付し或は

米麥調査時期に坪刈成績、收穫高調査の状況を見易き箇所に掲出し以て區民の統計に對する自覺を促す等、専心統計調査の改善に努めて懈らざるは洵に他の範と爲すに足るものなり。

主任から統計調査一覽表、昭和十年の村勢一斑と村治概要とを頂き、大きな示唆を與へられつゝ感激裡に其處を辭したのは十時三十分。

自動車で鴨川驛に引返し直ちに乗車房總西線に向つて出發。外房の勝景を車窓から眺めつゝ視察感想に花を咲かせ車中の人達を驚かすばかり。たゞ勝景とあまりにも數多いトンネルに聊か食傷氣味であつた、しかし千倉あたりからは丘陵と云ふ丘陵には、房々として枇杷がなつてゐる。實に見事だ。花嫁御寮でもあるかのように恥し氣にみんな一つひとつ綿帽子をかぶつてゐるのが殊に目を引く。

斯くて勝景とトンネルには満腹だつ

た一行も、胃の腑だけはとても空腹を感じたと見へ、着驛毎に汽車辨を鵜の目鷹の目で漁つたが外房では遂に求むること能はず。館山、保田、青堀こゝでも駄目、やつと木更津でありつく事が出来た、ぐつたりとして黙りこんでゐた一行も文字通り蘇生の思ひがしたらしく、俄かに元氣づきまた一しきり話題を賑はす。外房にくらべると内房はあまりにも静かで、荒波育ちの茨城ッ子には稍々興さめの形であつた。と同時に幾浦君、太内君、田中君あたりからしきりに帝都をあこがる、聲がもれた。こんな色々な氣持を乗せ汽車は霧らに走る。兩國驛だ。愈々帝都に第一歩を印したのだ。

これから羽方幹旋幹事長、油原會計幹事長等が一段と忙しくなる事と、心から同情の意を表さざるを得ない。帝都に着いた一行は俄然汗氣横溢。恰もびち／＼と躍る若駒の如く、華かな都會美に眼をくる／＼させつゝ自動

車で神田一橋寮に赴く。此處を第二夜の宿泊所と定めて直ちに靖國神社に参拜、尊き護國の神靈に對し、惜しみなく感謝と感激の涙を注ぎ謹みて神恩を敬謝し更に寶祚の無窮を守護し奉らむことを祈願した、それから一同一ツ橋寮に歸つた。

六月十三日 (第三日)

引續き天候に恵まれて今日も快晴。帝都の眞ん中としては比較的閑靜だつた爲か、ゆつくり眠る事が出来たのは何よりも嬉しく、五時半起床。起るや否や岡崎さんは復命書製作に着手す。朝食前にすつかり出来上り、一行は氏名の下に夫々捺印した。朝食をすましてから、三日間の精算に係る。油原幹事長から詳細なる御説明と決算報告があつた。兩幹事長に對して一同心から感謝の意を表した。

午前七時半最終視察日程に入る。第一が内閣統計局だ。まだ八時にならぬ

のに職員が出勤してゐるらしい。受付に待つてゐると、係官の方がきた。その御方の御案内で豫め定められた室にはいる。此處で國勢調査の處理の主要をきく。續いて執務や作業の實際についての御説明があつた。

女事務員の調査票の生年月による分類の手早さ、正確さ。分類集計機や穿孔器操作の水際立つた御手並、自動製表印刷機作業の巧妙なる手さばき、何れを見ても唯だ入神の技と申上ぐる外はあるまい。

次に人口動態の室にゆく。案内する係官は心得たもので、卓上だけで材料や表を示しながらの秩序整然たる御説明にてすつかり了解。次ぎに勞働統計の室に行き、係官の熱心なる御説明を聞き見學を了つた。

統計局係官の熱心にして懇篤なる説明に對し厚く感謝の意を表して辭去したのは十一時近かつたであらう。更にまた自動車で農林省に到る。引

率者の小林さんが統計課へ敬意を表すると農林屬の市橋さんと云ふ御方がきて應接室に案内された。少憩の後、省内をぐるつと一廻り見學。不在だと云ふので大臣閣下の室を一寸のぞく。

「此處から日本の農林行政の最高指令が發せられるのかなあ」としきりに感心する。再び統計課へ戻ると、懐しい我等の川崎統計課長がお見えになつて我々一行を構つてくれた。間もなく係の御方に招かれて農林省統計課長室の應接間へ案内された。

津田統計課長は「茨城縣は私共の取扱ます農林統計では全國第一位だと云つても過言ではない程の優秀なる成績である、今回の視察に依つて得る所大なるものがあつたと思ふ。之を動機として尙一層統計の完備に御精進あらん事を切望致します」との意味の御挨拶と共に其の職責の重大なる事を縷々力説された。

津田統計課長の御挨拶に於ける本縣

統計事務に對する絶贊の辭は縣下の統計事務従事者にとり此の上もない貴いお土産で、我々一行は心から一層の奮勵努力を誓ひ、各種統計を通じ眞に全國第一位、眞に日本一の榮譽を占めなければならぬと固く覺悟をきめた。續いて課長さんを中心に長畑統計官、市橋農林屬、石井統計官補を加へた座談會が期せずして開かれた。

津田統計課長「いゝ機會ですから役場の俸給や旅費についてお伺ひしたいのですが……」

川崎本縣統計課長「縣で一定してゐませんから順々にお願します。小貫さんの方は何うです」

小貫武田村書記「わしの方ちや、視察などは一日五兩で、普通は哩が五錢、一里が車馬賃四貫、日當が一兩二分でがんさ」

飯岡高道祖村書記「私の方で他所と違つてゐるかと思ふのは三里未滿が日當なしで、六里未滿が半日當で、六里

以上が日當を頂きます。視察講習は止當旅費の三分の二ときまつてゐます」大内日立町書記「郡内は大体同様ですが、郡外は三割増しになつて居ります」

津田統計課長「部内出張旅費は如何でせう」

油原「滯納整理、衛生は日當の半額で七十五錢で其他は三十錢です」

大内日立町書記「日立は大きな町で殊に一部落は乗物を利用するので其處だけが一圓他は三十錢です」

津田統計課長「お尋ねするのも變ですが俸給は」

小貫武田村書記「わし等はちゆうばで二十八兩でさ」

津田統計課長「ちゆうばとは何の事ですか」

小貫「中頃ちゆう意味でさ」と涼しい顔。

津田統計課長「ハハーさうですか」と云つて微笑。

其折小貫三郎老「かつくらせろ」辯
で縷々として役場内部の情勢を申上げ
た。

津田統計課長「誠に難有い。種々有
益な話を伺ひまして大へん参考になり
ました。こんどあなた(小貫さん)の方
へも伺つて種々お聞きしたいと思ひま
す」

川崎本縣統計課長「これで大体豫定
の時間も参りましたから打切りに致し
ます」

一同厚く御禮を述べて辭去。玄關前で
最後の記念寫眞を一つまたパチリとや
つてから川崎課長、小林屬に對し一同
を代表して岡崎君が感謝の言葉述べ
て目出度く解散したのは午後の一時頃
だったろう。

視察記の素描はこれで出来たわけだ
が、斯うした方面にはツブの素人故、
意餘あつて筆之に從はず、観点の不充
分、認識の不足等々で、不満足だけで
あらうことは筆者自身がよく分りきつ

てゐるのだ。責任を負はされて仕舞つ
たので、悲鳴をあげつゝ書いたんだか
らやむを得まいと諸君の温い心によつ
て、許して頂けるならば、幸之に過ぎ
るものはない。

諸君よ、この恵まれた視察をして一
層効果的ならしめ、統計事務の刷新を
計り協會に報ゐることを誓ひ、明朗且
つ愉快に日程を送り得たことをお互に
感謝し合ひたい。

終りに臨んで千葉縣當局、視察町村
内閣統計局、農林省の各位の御厚意に
對し謹んで感謝の意を捧げたいと存じ
ます。

視察員一行は左の通である。

- | | | | |
|-----|--------|----|----|
| 水戸市 | 市書記 | 幾浦 | 武男 |
| 西茨城 | 西山内村書記 | 羽方 | 慶治 |
| 那珂 | 鹽田村書記 | 岡崎 | 輝吉 |
| 多賀 | 日立町書記 | 大内 | 健司 |
| 鹿島 | 息栖村書記 | 大塚 | 廣一 |
| 行方 | 武田村書記 | 小貫 | 三郎 |
| 稲敷 | 柴崎村書記 | 油原 | 眞 |

- | | | | |
|-----|--------|-------|----|
| 新治 | 七會村書記 | 高平 | 寛 |
| 筑波 | 高道祖村書記 | 飯岡 | 榮助 |
| 眞壁 | 下館町書記 | 田中 | 健兒 |
| 結城 | 豊岡村書記 | 中島 | 良平 |
| 猿島 | 長田村書記 | 加藤由之介 | |
| 北相馬 | 高野村書記 | 渡邊 | 留吉 |
| 引率者 | 茨城縣屬 | 小林 | 綠 |

鹿島 北浦漁史貞

春日田家

菜畝又菜畝 蝶飛無處尋

請看田家富 門外總黃金

春江

扇洲樹色映殘陽 一片蒲帆々影長

數到湖來橋十二 水從楊柳簇還蒼

年斯うした調査を繰返して居るのであ
らう。

今や麥の秋も過ぎて夏の眞つ盛り、
廣い田の面は涼風になびいて夜は螢の
景物、是等は都人士には楽しい風景で
あらうが、働く農家に取つては煮え返
るばかりの暑さにも田の草とり、陸稻
の手入れ、やがて用水の不足ともなれ
ば、うらめしげに天を仰いでしたたる
汗ものかは、終日踏み車をふんでの
水引き、夜は夜で少しも多く我が田へ
水を引かんと蚊に刺されつゝ徹夜の水
門番、それもこれも秋の取り入れを思
へばこそその苦勞である、農家の眞の涼
味はこれからだ、豊かな收穫を見てか
らだ、今年こそ調査員も被害調査をせ
ずに済む様大豊年を期待して、天に頼
み神に祈らずには居られない。

秋季調査と調査員の注意

農家の多忙に續いて統計調査員の忙
しいのもこれから、夏季調査の集計
米作付反別の調査、一般秋季作物の調



實務 統計調査の葉 (10)

煮えかへる稻田も涼し

豊かなる秋の稔りを思へば

農家の眞の涼味は是から



連年の早害に、やれ今年はと思ふも
あだなりき、今度はひどい冷害に悩む
こと既に二年、殊に昨年は未曾有の大
水害をも蒙り、農家としてはさても
受難の年であつた。

此の受難の年こそ調査員にとりても
亦ご難の年で、豫想收穫高、收穫高等
の調査の外、被害調査を幾たびさせら
れたことか、思へば世の中が進むにつ
れ統計の使命は愈々重くなり、總ての

仕事が統計に依つて生れ、統計の其の
内容に依つて生長もし、また終りもす
るのであり、統計があらゆる政策を生
んで、社會を健康にし、國家を健康に
し、そして其の發展を爲さしむる所以
である以上、調査員は是等の健康素を
調製することゝなるのであるから、調
査季節の苦難も、如何なる面倒さもし
のんで正確な資料を得なくてはならぬ
ことは勿論で、此の意氣あればこそ毎

査、米生産統計調査方法に依る基準票調査票の作成等目まぐるしい活動を開始せねばならぬ時だ、次に其の要領を記すこととする。

耕地圖及作付反別調査原簿の整理

耕地圖と作付反別調査原簿の加除整理は、調査員として最も大切のことで之を調査の基礎とするものであるから常に耕地の現状と一致せしむることが肝要である。基礎帳簿の正確こそ正確な統計調査の第一と云ふべきであるから此の点は先づ第一に注意すべきことである。

本季調査の作物

本季の調査作物の種類と調査の期間報告期限を示せば次の通りである。

作物ノ種類	調査期	報告期限
アワ	自九月	十一月十日
ヒエ	至十月	
キ		
トウモロコシ		
バナ		

米生産統計調査員は、耕地圖及作付反別調査原簿と對照の上、自調査区内耕作者を調査するのであるが順序として自調査区内に住居を有するものを先にし、他調査区より來りて自調査区内を耕作するものを後にして米作農家一覽を作製することが適當である。此の外他町村より來りて耕作する者もあらうが、此れは本調査では入作として全部を一括することとなるから、此の者の氏名は右一覽には掲載する必要が無し。

然して米作農家戸數として報告される分は右米作農家一覽に記載せられたもの、數では無く其の調査区内に住居があつて米作を爲すもの、農家數であるから混同しない様に注意を要する。

2. 作付反別調査

米の作付反別調査は陸稻に就ては前掲の通りに調査するのであるが此の場合には耕地圖及作付反別調査原簿と對照することは勿論で此の對照審査に依り

ジャガイモ(秋播)	自九月	十一月十日
大根(秋播)	至十月	
ツケナ		
カブ		
ニンジン		
ゴボウ		
ネギ		
レンコン		
クワイ		
實果	日本梨	收穫時期 十月末日
西洋梨	ブトウ	

向米の生産統計調査に於ては次の順序に依り處理することとなるのである
米作農家一覽 調査期 報告期
作付反別調査 八月上旬 九月十日
基準票の作成 九月上旬 九月十日
調査票の作成 十月上旬迄
結果表の作成 十一月中旬迄
右の内米作農家一覽の下の報告九月十日とあるのは米作農家戸數の報告であつて、右農家一覽より自調査区内に住居を有し米作を爲すもの、戸數を拾つて報告するのである。

特に米作地圖を作成せずとも農林省の趣旨にも縣の規定にも合致することとなるのである。

水稻に在りては作付反別調査票は用ゐぬが大体前同様の趣旨により調査するものであるが水稻は田の殆んど全部に作付してあるものであるから耕地圖と作付反別調査原簿と對照して耕地圖へ符箋を附して作人、粳米糯米の別、作柄等を記入するか、作付反別調査原簿の欄外に貼紙をして右の事項を記入するかして一筆毎の調査を完了すべきである。

此の調査は九月二十日現在の米第一回豫想收穫高表にて總反別が報告されることになるのであるから右期日迄に正確に調査するのである。更に右一筆毎の調査にて補助表を作り各農家毎の反別を知り基準票、調査票の作成となるのであるが右は次號に記載することとする。

秋季作付反別調査

秋季作付反別の調査は米生産統計調査方法の實施前は春季の調査方法と大差なかりしが、右調査方法實施の結果二つの調査方法に分離して行ふ様になつた爲非常に複雑となり、調査員として一年の内最も困難な季節となつた。米の調査に就ては以下順次記載することとし、先づ一般農作物に付記述すると、作付反別調査票は春季調査の際欄外記入を終り既に春季、夏季を調査済のことであるから、今度は秋季の欄に其の土地に作付してあるものを各作物毎に面積を調査するのである。

但し陸稻は米の生産統計調査方法に依る前に作付反別調査票に依り一筆毎に調査して之に作人を記入して分類の上右調査方法により處理することが便宜であらう。

米の生産統計調査

1. 米作農家一覽の作製

園藝農産物果實ノ二

(市町村報告期八月十五日限)

本表は農産物調査方法の春季調査の際に、調査員の實地調査に係るものを整理提出したる集計表により製表するもので、其の種類はネーブル、オレンジ、ナツミカン其の他の柑橘類で、樹數は何れも結果の樹齡に達したのみを調査すべきものであるから、之に其の年收穫皆無の場合でも其の樹數を調査算入すべきであります。其の他の柑橘類にはレモン、橙、柚、金柑、ブッシュユカン等を含みミカンは含まないものであるから注意せられたい。

水稲作況

(市町村報告期八月十八日限)

水稲作況は八月十五日現在を以て調査の上八月十八日迄に縣へ報告するのであります。

この調査では作付反別の増減に何等關係なく其の年の水稻の作柄のみ調査するのでありますから水稻の生育狀況

を實際に巡視して左の五つの標準によつて何れかその一つを表示して報告するのであります。

「普通作況」とは前五ヶ年間に於ける中庸の作柄を、「稍良」とは普通作況に比し增收五分以内の見込の場合を、「良」とは普通作況に比し增收五分を越ゆる見込の場合を、「稍不良」とは普通作況に比し減收五分以内の見込の場合を、「不良」とは普通作況に比し減收五分を越ゆる見込の場合を謂ふのであります。

本表は極めて迅速に報告を要しますから八月十八日迄に報告書本廳へ到達せざる見込の町村は必ず電信電話又は其他適當の方法を以て報告する様願ひます。

〔夏秋蠶繭豫想掃立數量〕

(市町村報告期九月五日限)

本表は九月一日現在で擔當區内各飼育者に就いて調査し蠶繭調査方法によつて作製する夏秋蠶繭調査原簿を基礎と

備考欄には前年に對する増減の事由は勿論所定事項殊に天候の變化病蟲害の有無等は最も重要な事柄でありますから具体的に記述する様願ひます。

〔米作農家戸數調〕

(市町村報告期九月二十三日限)

本調査は九月二十日現在を以て各調査員が其の擔當調査區内に於ける米作農家と米作準農家に付いて調査するのですが特に左記事項に留意の上誤りなきを期せられたいのです。

一、米作農家は世帯員中米作を爲すものある世帯數を計上し、又米作準農家は學校、試験場、組合、會社、其他法人又は團體にして米作を爲すものを計上すること、

管理者を置いて米作を爲す場合には其の管理者に付前項の區分に從ひて夫々計上すること、

二、米作農家數及米作準農家數の計上に當りては其の經營耕地の所在の如何に拘らず米作農家又は米作準農家所

して豫想掃立數量を作製するのであります。期限の格守其の他の注意は三月號實務道場に載せてありますから参照して誤りない様に願ひます。

〔園藝農産物蔬菜及花卉の一〕

(市町村報告期九月十五日限)

本表はひばり囀るる三月から五月の好季節にかけて、農産物調査方法によつて調査員が實地調査を遂げこれを纏めた春季調査集計表を基礎として調製するのであります。收穫量は成熟したる時の收量を調査するのですが本縣の實狀としては成熟を俟たず食用に供せらるゝものが多いのですから斯ういふ場合には規定が成熟したる時の數量によつて調査することになつて居ますので大体生一貫に付エンドウは八合乃至九合ソラマメは一升内外の割合で換算して算出計上せねばならぬのであります。

〔米第一回豫想收穫高〕

(市町村報告期九月二十三日限)

在の市町村に於て之を計上すること、
三、米作農家一覽を其の儘利用する時は必ず重複計上する様な虞れがありまますから之は絶対に避けられ飽くまで實地調査に因ること、
四、米作準農家の種別を明かならしむる爲に必ず其の名稱を備考に記載すること、
五、調査の上は必ず前年と對照し其の増減事由を備考へ記載すること、

〔製茶〕

(市町村報告期九月末日限)

製造戸數は、其の季節に於て自家用と販賣用とを問はず、製茶に従事したる戸數を調査計上すべきもので、右季節中に一番、二番、三番茶等と其の年に於て數回製茶に従事するも、同一戸であれば一戸として調査すべきは勿論であります。

表中製茶の種類は玉露、煎茶、紅茶、番茶其の他の茶に區別せられ、各其の製法に依り區別調査すべきであります

本調査は九月二十日現在により調査の上九月二十三日迄に報告書本廳へ到着する様急速報告を要しますから報告期限に遅れざる様特に御手配願ひます
本表作付反別の調査は縣細則により米作地一筆毎に所定の調査票を用ゐる實地調査した反別を集計して作付反別欄に計上するのでありますから調査員は遅くも八月中旬にこの調査を終らねばなりません。

豫想收穫高は調査員に於て受持調査區内に於ける米作地を巡回調査し且つ精農家數名の意見を徴して水稻及陸稻に付粳米糯米別に早中晩毎に上中下の階級に別ちて各一反歩當の豫想收穫高を決定して夫々該當の段別に乘じ其の市町村豫想收穫高を算出するのであります。但し無收穫となるべき見込反別があれば之を控除せねばなりません。

前年收穫高欄へは前年の實收穫高を計上すべきでありますから誤つて前年豫想收穫高を計上せぬ様注意を要します

が、本縣に於ては煎茶が大部分で、番茶玉露の生産は甚だ僅少である、然して茶の製造に際し粉茶を生ずるが、此れを調査する場合に其の他の茶欄に計上されるものがあるが、粉茶は各其の本茶に合算計上すべきでありますから注意せられたい。

〔園藝農産物果實ノ三〕

(市町村報告期九月末日限)

園藝農産物果實ノ三(ウメ、モモ、アウトウ、ビワ)は農林統計報告規則取扱細則の夏季調査に屬するもので果樹園の部と果樹園以外の部とに分けて調査するので果樹園の調査は果樹園毎に調査し果樹園以外の部は各作人別に調査するのであります、又樹數は收穫の目的を以て栽培したるものにて且結實の年齢に達したるもののみ調査するのであります、收穫高は梅のみは枳(何升何合)にて調査し他は他れも貫にて調査し一本當の收穫高や單價等に注意し前年に比し著しく相違の時は備考

に必ず説明を願ひます。
尙統計事務監督の際本小票を忘れがちですが必ず持参する様致したいものです。

□一反歩收穫高並單價

夏期に於て收穫すべき主なる作物の昭和十年に於ける反當收量並單價を参考として掲ぐれば次の通りであります

綠肥用作物	
反當	十貫匁
田	價額
レ	三〇一
ン	四二二
ゲ	一五

モクシク	二七五	五三〇	一四
ソラマメ、エンドウ	三二〇	四五二	一五
青刈大豆	三七一	二七六	一四
其ノ他	三五三	四三七	一五

園藝農産物蔬菜及花卉

反當		單價(一石)	
反當	價額	反當	單價(一石)
エン	一〇九七	一	八四
ソラ	一、四一一	一	二一六
タマ	三一七	一	一三
キャ	四二七	一	八
ベ	三三四	一	七
カ	三三四	一	七
ブ	三三四	一	七
ラ	三三四	一	七
大	五九三	一	六

ツケ	ナ	四四七	七
イン	ゲン	マメ	八四二
一七	三	八	
食用	農産物		
反當	單價(一石)		
ジャ	ガイ	モ	三四五
八			

反當收量		單價(一石)	
反當	收量	反當	單價(一石)
大	二、三五九	八	〇六
小	一、五五八	一	二四九
稈	一、五九〇	一	九六
燕	一、七三三	一	八七

統計優良村視察

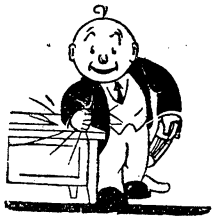
—[照參繪口]—

結城郡名崎村鈴木書記外統計調査員十名は、五月十日統計事務優良町村視察の途次縣統計課に來訪川崎統計課長より懇篤なる訓示を受け、それより那珂郡佐野村に赴き全村統計主任根本書記より諸調査方法に付き懇切なる説明を聴き

大いに得る處あつて全日歸村した
× × ×
行方郡大和村統計調査員十二名は五月六日平塚統計主任に引率され、久慈郡賀美村の統計事務を視察し、歸途縣廳に統計課を訪ひ郡擔任小林鷹の案内で廳内を見學、

記念撮影の後歸村した。

× × ×
多賀郡高岡村統計調査員一行十名は同村書記豊田武門氏に引率され、五月五日那珂郡佐野村の統計事務を視察の上、更に統計課を訪問、事務上の見學を遂げ、歸途縣立農事試験場を視察歸村した。



統計相談所

統計に關し疑問なり又は不明な点がありましたら、御質問合せ下さい。お答へ致します。

(問) 各種生産物の價格は卸賣平均價格により調査すべしとあるも、小賣ありて卸賣なき場合は小賣値段によりて調査すべきものなりや
(答) 價格の調査上卸賣の取引なく平均値段調査し得るときは小賣價格により卸賣平均價格を見積り掲上すべきものとす、
(問) 綠肥用作物の種子を採取する目的を以て栽培したるものは調査を要せざるや
(答) 御見解の通
但し中途種子を採取したるものなるも最初栽培の目的が綠肥なるときは用途の變更如何に拘らず凡て調査を

要す、
(問) 茶畑桑畑の畑の欄内には如何なるものを記入するものなりや
(答) 畑の欄内には茶又は桑を栽培せるものは主作物たると又混作間作たるとを問はず凡て調査を要すべく而して桑畑に在りては畑の欄を更に本畑と其の他の二つに區別しあり即ち本畑には桑の主作物を其の他には混作間作のもの掲上するものとなり又前記以外の其の他の欄には茶畑、桑畑とも畦畔其の他畑以外の地に栽培したるものを見積りて掲上すべきものとす、
(問) 中途蠶種を投棄したるものも一

且掃立たるものは調査を要すべきものなるも例へば甲の掃立たるものを乙に譲り渡したる場合は如何にして調査すべきや
(答) 甲の掃立より之を除き乙の掃立數量に加へ調査せられたし、
(問) ナタネの前年作柄に對する其の年作柄の割合中若し其の町村に前年作付の事實なきときは如何にすべきや
(答) 附近に於ける前年作柄により記載し附近に依るべき作柄なきときは空欄の儘とし其の旨備考に記載せられたし
(問) 桑苗の栽培は爲し居るも未だ養成済の苗木が無き場合は調査を要せざるや
(答) 斯の如き場合は生産戸數のみは調査し苗木は調査を要せず、
(問) 桑苗表注意第二第三によれば砧木として使用せらるるものは調査を要せずとあるを以て砧木としたる實

生苗は全然調査を要せずと解し差支なきや

(答) 桑苗は調査期間内に於て養成済のもの最後の運命により實生接木其の他の苗木に區別して調査報告すべし従つて砧木となしたる實生苗は實生苗として計上せず接木苗として

養成済の年に於て調査報告すべきものとす、

(問) 桑苗は養成済のもののみを調査するは勿論なるも例へば移植せず販賣も配付もせず其の儘翌年に持越すものは如何に調査すべきや

(答) 發育不完全なる爲尙養成を要し

翌年に持越すものは更に發育完全なる年に於て調査すべきものなるも移植も販賣も又配付もせず發育完全なるものなれば即ち養成済のものなるを以て其の年の生産として掲上せられたし

八月二十日 縣民の病狀調査

國民健康と醫事救療は刻下の重要問題として論議せられ、健康省の設置をすら盛んに叫ばれるに至つたが、縣衛生課では本縣醫師會と聯合で、來る八月二十日を期し、百六十萬縣民の病狀調査を行ひ、縣民の眞の健康狀態を精密に調査すると共に、醫療醫藥の資はもとより、たとへ病氣と名を付けざる迄も、肩がこるとか、腰が痛むとかして按摩にかゝるとか、賣藥を用ひるとか、一文符を貼るとか、苟くも人間の身體に關する出費は一々詳細に調べあげ、健康のために要するほんたうの經費を見いだし、所謂庶政一新の資に供することゝなつた、誠に結構な企てであるが、是れは本縣の獨創的試みである。



各地統計雜信

調査員諸君
何なりと奮
つて御通信
を願ひます

筑波郡下の各研究會

筑波郡中部統計事務研究會 六月十三日同郡島名村役場に於て定例研究會を開き縣統計課より同郡擔當の岡崎主事補が臨席した、午前九時三十分開會、開會地たる村長代理として鯉淵收入役の挨拶に次ぎ縣提出事項に就き岡崎主事補より詳細説明の後質疑應答を爲し午後二時五十分閉會した。出席者左の如し

- (島名村) 鯉淵收入役、飯塚書記 (眞瀨村) 吉村村長、山田書記 (旭村) 佐々木書記 (上郷村) 石濱書記 (谷田部町) 富澤書記、鈴木書記 (葛城村) 中島書記

(福岡村) 飯泉書記 (小野川村) 成島書記
筑波郡南部研究會 五月二十三日午前九時より鹿島村役場樓上に開き十和

鹿島、長崎、小張、板橋、豊、三島、久賀、谷井田九ヶ村の統計主任全部出席、登坂十和村長、會長席に着き

- 一、統計調査員の待遇改善案
- 二、統計事務の實際的研究

の二項につき各自体験に立脚して交々意見を述べ、なほ統計事務優良町村視察の件を決議し、引續き記念品贈呈式を舉行し會幹事として多年盡力せられたる十和村統計主任古谷明氏に青銅火鉢一對を贈つて其の功勞に報ひた。

筑波郡北部統計事務研究會

五月二十日同郡吉沼村役場に於て定例研究會を開催した、午前九時開會、會長病氣欠席のため飯岡副會長より協議事項並に本年度豫定事業の説明後田井村櫻井書記其他の體験を中心としたる研究發表あり午後二時閉會、出席者は左の如し

- (吉沼村) 杉山書記 (大穂村) 柳町書記
- (北條町) 飯竹書記 (筑波町) 酒寄書記
- (田井村) 櫻井書記 (田水山村) 松崎書記
- (作岡村) 高橋書記 (菅間村) 小笠原書記
- (高道祖村) 飯岡書記

尙ほ豫定事業は左の如し

△定例研究會 七月(作岡村) 九月(田水山村) 十一月(高道祖村) 十二月(菅間村)
筑波郡統計主任者會議 四月十八日

同郡谷田部小學校に於て開催、縣よりは川崎統計課長及岡崎主事補、町村よりは筑波町を除く全町村統計主任者が出席、岡崎主事補より縣提出事項に付詳細説明し質疑に答へ、研究會を終了それより本縣統計協會總裁より表彰

された小野川村書記成島一男氏、小張村調査員沼尻鶴之介氏に對する表彰状の傳達式に移り、川崎副會長之を傳達して式辭を述べ、祝辭及答辭ありて式を閉じた。

結城郡支部總會

結城郡支部總會は五月五日午前九時三十分より結城郡自治會館に於て開催、縣より川崎統計課長及小泉屬が出席、縣提出指示及注意事項に付き詳細説明をなし熱心に研究する處あり、次で去る二月十一日紀元節の佳辰を卜し統計功勞者として本縣統計協會總裁より表彰せられた結城郡結城町書記海老原眞三郎、總上村農林商工統計調査員三原泰次郎、蠶飼村農林商工統計調査員廣田廣吉諸氏に對する表彰狀傳達式を行ひ、川崎副會長之を傳達し、次いで永瀨全郡町村長會副會長の祝辭、受賞者代表結城町海老原書記の答辭があつた

稻敷郡下の各會合

稻敷郡支部第一部會 四月二十八日

龍ヶ崎町小學校講堂に於て龍ヶ崎町外九ヶ村の統計調査員訓練會を開催した縣より川崎統計課長及關屬臨席、部會長欠席の爲、吉田奥野村長開辭を述べ曩に農林大臣より選奨せられたる柴崎村書記油原眞氏に對し統計課長より選奨狀の傳達あり、統計課長の式辭、吉田奥野村長の祝辭、油原書記の答辭ありて閉式、續いて調査員訓練に移り、統計課長より統計の重要な使命並に取扱細則による小票調査の實施に對し將來の希望等に付講話あり、關屬より取扱細則に規程せる調査方法を詳細説明質疑に應答の上散會したが出席者百名にのほり盛會であつた。

稻敷支部統計事務研究會 四月二日

日江戸崎町縣蠶業取締所江戸崎支所に開催し、縣より川崎統計課長、關屬臨席、過日統計協會總裁より表彰せられた牛久村書記晝田金之助氏、安中村統計調査員栗山幸之助氏に對する表彰狀

の傳達式を舉行、川崎副會長之を傳達の上式辭を述べ、鴻巣副支部長(副柴村長)の祝辭、栗山統計調査員の答辭あり、それより研究會に移り縣提出の指示注意事項につき質疑應答を重ね鋭意研究を遂げた。

第十八回内閣統計講習會

本縣統計協會では優良統計執務者養成のため内閣統計講習會に左の如く選抜の上一部旅費の補給をなし派遣することになつた

- 久慈郡賀美村書記 助川 國勝
- 多賀郡磯原町書記 長瀬 昇
- 猿島郡神大賀村書記 羽富 好
- 北相馬郡守谷町書記 田中 正

尚ほ講習は來る七月二十日から八月八日迄東京市本郷區東京帝國大學の豫定で講習科目は次の通りである

- △一般統計△人口統計△労働統計及労働統計實地調査△經濟統計△産業統計△數理統計△統計實務△經濟學△憲法及行政法△財政學

- 全 廿七日結城郡山川村 全
- 全 廿八日全 郡中結城村 全

地方統計課長會議

川崎統計課長出席

本年十月全國一齊に施行せらるる第五回労働統計實地調査に就いて六月十一、十二日の兩日内閣統計局に於て地方統計課長會議が開催され、本縣よりは川崎統計課長及び虎口屬が出席した本調査に關する勅令閣令以下の諸規定は過日公布になつて居るが、今次の改正により調査範圍も従來とは相當の變更を見て居る、例へば労働者三十人以上を使用する工場を五十人以上を使用する工場又は、交通事業體と云ふことになり、尙特例種類に就ての労働者數の制限もあるし、調査事項をも改正した点もある、殊に今回始めて調査することになつた交通業では陸上運輸、運輸取扱業及船舶であつてこの交通業に就ては、一般工場、鑛山とは違つて實

統計映畫並講演會

縣下各地で開催

七月二日	多賀郡日高村	於全村小學校
全 三日	筑波郡谷井田村	全
全 九日	全 豐村	全
全 十日	北相馬郡高須村	全
全 十五日	全 北文間村	全
全 二十日	眞壁郡紫尾村	全
全 二十一日	全 村田村	全
全 二十三日	稻敷郡君賀村	全
全 二十四日	全 鳩崎村	全
全 二十七日	那珂郡石神村	於全村小學校
全 二十八日	全 鹿島郡沼前村	全
全 三十日	全 神崎村	全
全 三十一日	全 鹿島郡沼前村	於全村小學校
全 八月一日	全 新治郡林村	全
全 八日	全 戀瀨村	全
全 十日	全 東茨城郡上野合村	全
全 十一日	全 堅倉村	全
全 十三日	全 久慈郡磯初村	全
全 十三日	全 郡戸村	全
全 十七日	全 西茨城郡北山村	全
全 十八日	全 西山内村	全
全 二十日	全 猿島郡逆井山村	全
全 廿一日	全 八俣村	全

統計の調査と云へば税金の資料であるとの直感から、兎角調査を嫌ふた時代もあつたが、近頃では大分統計の重要性……國家的にも、個人的にも、極めて大切なものであることを意識されて來たことは事實であるが、尙誤解して居る者のあるのは、常に統計従事員の嘆きの種で、各市町村でも種々な施設を講ぜられて居ることなれども今はいよいよ統計協會でも會の事業として統計映畫講話班を組織して、この七月より縣下二十八ヶ町村を選定し、統計思想の普及徹底を圖ることになつた、今日迄に決定した町村は左記の通りで漸次全縣下に及ぶ譯であるから相當の効果を收むることゝ期待されて居る。

査に當つては種々な困難が伴ふこと、豫想せらるゝので縣でも種々と考究中である。七月十三日には市町村主任會議を開催するので之が準備に課員は多忙を極めて居る、當日の書記官長訓示並會議事項は左の通りである。

内閣書記官長訓示概要

現時我國ハ眞ニ非常ノ時局ニ遭遇シマシテ、庶政ヲ一新スルノ必要ニ迫ラレテ居リマスコトハ、更メテ申述アル迄モナイ所デアリマス。而シテ舉國一致其ノ實現ヲ期シマスルガ爲ニハ、官ニ身ヲ奉ズル者ガ、特ニ率先全力ヲ傾倒シテ其ノ本分ヲ竭シ、報效ノ誠ヲ效サネバナラヌト存ズルノデアリマス。諸君ノ任務トセララル統計ハ、現下ノ時局ニ對應スベキ各般ノ國策ノ樹立並ニ實行ヲ合理的計畫的ナラシムル基礎トナルベキモノデアリマシテ、其ノ改善整備ノ必要ヲ一層痛感セラシムルデアリマス。諸君ハ各自ノ職責ノ重大ナルコトヲ深く自覺セラレ、今後一層精勵努力セラレンコトヲ切望致ス次第デアリマス。

代りて挨拶を爲し尙引續き議長として司會された。

本會設立の目的は地理的事情の等しくせる府縣が協調して統計事務刷新上の範を示し、團結して統計施設改善充整の策を献し、併せて統計事務關係者の相互の和親を圖らんとするもので左の建議事項を可決して統計の益々整備を圖り、尙協議、聽伺事項等によりて、各々探長補短、相互の刷新向上の資となし當初の目的通り有意義に終始した。

主なる建議事項は左の通りである

- 一、國富及國民所得調査に關する法規制定方の件
- 一、模範軍需動員實施方の件
- 一、全國的重要物産移出入量調査實施に關する件
- 一、道府縣統計協會に對し國庫補助金交付方を其の筋へ建議するの件
- 一、統計費補助金増額方に關する件
- 一、農林商工兩省統計課昇格に關する件
- 一、産業職員制統計主事補定員増配に關する件

扱テ、今秋實施セラレマス勞働統計實地調査ハ、各種社會問題ニ對スル對策ヲ樹立シ、社會立法ノ整備ヲ必要トスル今日ノ情勢ニ於キマシテハ、洵ニ重要ナル意義ヲ有スルモノト申サネバナリマセヌ而モ今回ノ調査カラハ、社會ノ要望ニ應ジテ工場鐵山ノ外ニ新ニ交通業ヲモ加ヘテ之ヲ調査致スコトニ勅令ノ改正ヲ見マシタノデアリマシテ、此ノ結果ハ從前ノ調査ニ比シ勞働統計ノ効用ヲ一層大ナラシムルコトト信ズルノデアリマス。就テハ此調査ヲ完全ニ遂行致シマスル爲ニハ其ノ根柢タル地方實査ノ成績ヲ舉グルコトガ最も肝要デアリマスガ、是ハ偏ニ地方實査ヲ直接ニ指導監督セラルル諸君ノ御盡力ニ俟ツノデアリマシテ、私ハ、諸君ノ周到ナル用意ト遺漏ナキ手配トニ依リマシテ、今秋ノ調査ニ優秀ナル結果ヲ收メタイト存ズルノデアリマス。

會議事項

- 一、調査工場の範圍に關する件
- 二、交通事業體の調査に關する件
- 三、調査員指導員推薦に關する件
- 四、指導員の配

する件

- 一、産業統計調査法意徹底に關する件
- 一、消費統計調査に關する法規制定方を其の筋に建議するの件
- 一、統計調査員徽章制定及報告用紙の交付方に關する件
- 一、統計調査員の統計講習會出席に際し鐵道賃割引方の件
- 一、統計思想宣傳映畫作製の件
- 一、統計事務功績者國家的選奨範圍擴張に關する件
- 一、農林統計調査事務従事員選奨詮衡上に關する件
- 一、織物統計様式統一に關する件
- 一、學事統計調査費交付方に關する件
- 一、其の他前年議決事項にして實現無きものの再建議

柳澤保惠伯の逝去

伯爵柳澤保惠氏は豫てより尿毒症のため吳博士の手當を受けて居たが、病勢重なり五月廿五日午後八時半東京芝區田町八ノ一の自邸で逝去された、享年

置に關する件 五、調査の趣旨普及に關する件 六、調査書類の管守に關する件 七、準備調査に關する件 八、船舶の調査時期に關する件 九、陸上運輸業の調査單位に關する件 一〇、入渠中の船舶の調査に關する件 一一、陸上運輸業の事業の種類に關する件 一二、調査事項の記入方に關する件 其の他四項

第二回關東區府縣

統計事務協議會

昨年四月二十五日申合規約に基いて設立された、關東區府縣統計事務協議會は、昨年第一回を栃木縣に開催したが、續いて本年は其の第二回を六月十五、十六の兩日埼玉縣浦和市の埼玉會館に開催された。

各府縣共課長の外課員一名乃至二名の出席があり、本縣よりは川崎統計課長と成瀬屬が出席した。

當日は恰も地方長官會議開催中なりしを以て、玉田埼玉縣總務部長知事に

六十七、伯は我國統計界に造詣深く、斯界の權威と稱せられてゐた、計報に接し、本統計協會でも川崎副會長の名を以て弔電を發し謹んで哀悼の意を表した。

伯は越後黒川藩主柳澤光昭氏の次男で、舊大和國郡山藩主保申氏の養子となられ學習院卒業後ベルリン、ストラスブルグ大學、ウィーン大學に學び歸朝後は早大講師、英國欽定統計學院名譽會員、國際統計學院正會員に擧げられ、又多年統計學社社長とし統計の普及に努められ現に名譽社長たるばかりでなく財團法人柳澤統計研究所總裁として本邦統計學界の權威である。尙ほ伯は大正七年より東京市會議員に數回當選、市會議長たりしことあり、また貴族院議員には明治三十七年以來當選せられ、その名委員長振は人のよく知る所である、今回も豫算委員長として病をおして活躍されて居たもので五月二十日から自邸で療養中たりしもの、其の急逝は各方面から非常に惜まれて居る。



麥作は減収か

呪はしき雪・雪・雪！

豫想收穫高七萬七千石減

今年こそはと、彼の恐ろしき水害の後を受けて、彼の呪はしき冷害の後を受けて、五穀の豊穰こそ縣下全農民の等しく念願するところであるが、縣統計課の發表によると本年の麥作は夏作の關係上播種の遅れたのと、冬季に於ける天候兎角順調を缺き、雪、雪、雪で雪害を蒙り、一般に生育を阻害され、作付反別は

拘らず、五月二十日現在の調査による麥の豫想收穫高と前年實收高との對比は

本年反別
大麥 三三、六六一・〇反
裸麥 二、七五六・七
小麥 五〇、三五八・七
計 八六、七七六・四

本年反別

前年作付反別ニ比シ

本年豫想收穫高
大麥 七九七、二五五石
裸麥 四一、九四六
小麥 七五五、三一三
計 一、五九四、五一四

前年收穫高ニ比シ
減 六八、〇九二石(〇割七九)
減 五、七二三 (一割二〇)
減 三、一五六 (〇割四)
減 七六、九七一 (〇割四六)

で、前年實收高に比し七萬六千九百七十一石即ち四分六厘の減収を見るべく豫想されてゐる、之を郡市別に示せば次の通りであるが實收に於ては今回の雨害に依り更に減収するであらう。(△印は減)

の數字を示し、總反別では約二千町歩からも増加してゐるに

郡市	大麥				裸麥				小麥			
	作付反別	豫想收穫高	前年收穫高	前年收穫高ニ比シ増減	作付反別	豫想收穫高	前年收穫高	前年收穫高ニ比シ増減	作付反別	豫想收穫高	前年收穫高	前年收穫高ニ比シ増減
水戸	100.1	2,267	2,203	△	100.0	10	10	△	100.0	1,335	1,335	△
東茨城	33.5	6,661	6,661	△	33.5	6,661	6,661	△	33.5	6,661	6,661	△
西茨城	11.1	2,222	2,222	△	11.1	2,222	2,222	△	11.1	2,222	2,222	△
那珂	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
久慈	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
多賀	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
鹿島	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
行方	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
稲敷	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
新治	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
筑波	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
眞壁	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
結城	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
猿島	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
北相馬	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△	2.7	2,727	2,727	△
合計	33.5	6,661	6,661	△	33.5	6,661	6,661	△	33.5	6,661	6,661	△

又も天候に禍ひされて

春蠶

悲觀の豫想

縣統計課の調査

六月十五日現在に於ける統計課調査の本年度春蠶豫想收繭高は百七十一萬七千九百五貫（内白繭三十三萬六百貫、黃繭百三十八萬七千三百五貫）にして前年收繭高百八十一萬七千六百二十貫に比し九萬九千七百十五貫即ち零割五分五厘の減少を示してゐる、而して以上の如く減收の豫想を見たるは桑園整理改植等に基く桑葉量の減少により掃立數量を控へたと、掃立後の氣候概して順調なりしも壯蠶期前後に至り冷濕となりし爲飼育に困難を來し一方桑葉の發育も亦良好でなかつたり尙多少の病蠶をも發生したるに因るものである、郡市別豫想收繭高及び前年收繭高との對比左の如し

郡市別	豫想收繭高		前年收繭高		前年ニ比シ増減(△印ハ減)
	白	黃	計	貫	
水戸	五九三	一、〇六四	一、六一七	一、三六〇	△ 二五七
東茨城	四〇、〇〇三	一九一、一一二	一三二、一一五	一三四、一三二	△ 三、〇一七
西茨城	二〇、三六〇	四三、八三〇	六四、一九〇	六七、五九七	△ 三、四〇七
那珂	二一、二五一	三八、八三七	六〇、〇八八	六三、一八二	△ 三、〇九四
久慈	九、九五三	四九、九五三	五九、九〇六	六一、四八一	△ 一、五七五
多賀	三、一三一	一、八九一	五、〇二二	五、〇六八	△ 四六

郡市別	豫想收繭高		前年收繭高		前年ニ比シ増減(△印ハ減)
	白	黃	計	貫	
廣島	一四、五七八	六八、二五七	八二、八三五	八八、二一五	△ 五、三三八
行方	一一、九五〇	六〇、九〇一	七二、八五一	七九、一三八	△ 六、二八七
新治	五四、三一六	一七八、四一一	二三二、七二七	二五三、八一七	△ 二一、〇九〇
筑波	六五、三六八	二一五、二八二	二八〇、六五〇	二八一、四八七	△ 一六、八三七
眞壁	二七、五八七	一九九、二六三	一二六、八五〇	二四三、七八〇	△ 一六、九三〇
結城	一一、七五一	一三三、六七二	一四五、四二三	一五二、九七八	△ 七、五五五
猿島	三、四六九	二〇二、七〇〇	二〇六、一六九	二二三、七二三	△ 一七、五五四
北相馬	三二、三〇七	四一、三四八	七三、六五五	七七、四五七	△ 三、八〇二
合計	一四、〇二三	六〇、七八四	七四、八〇七	八四、二〇五	△ 九、三九八
合計	三三〇、六〇〇	一、三八七、三〇五	一、七一一、七〇五	一、八一七、六二〇	△ 九、九七一五

生産第廿六位

昭和九年度全國の總生産額調べが、此の程漸く出來上つて發表された、これによると我が茨城縣の生産總額は一億九千二百二十三萬九千九百九十四圓で全國の第二十六番目に位してゐる。

之を各種別に分類してみると農産物は九千五百一萬九千二百八圓で第七位、蠶絲では二千六百三十八萬二千五百五十六圓で六位、畜産は四百五十八萬九千二百十四圓で十五位、林産は六百十萬七十六圓で二十六位、水産は七百八十萬九千二百一十一圓で二十位に落ちたが鐵産に於ては二千五百五十三萬五千三百九十二圓で第八位に頑張り、工産は五千八十萬四千八百四十七圓で三十四位に下つた。

又これを一戸當にみると六百六十八圓、一人當は百二十四圓にしかならぬ、全國でも生産の少ない方で、大阪あたりは一戸二千百八十二圓、一人四百五十六圓、愛知は一戸千八百九十八圓一人三百七十九圓にもなつてゐる、工業の盛んな處は概して裕福のやうだ。

林

産六百四十二萬餘圓

外に三百萬圓の副産物

十年度の林野産物調

昭和十年に於ける林野産物總價額は六百四十二萬一千三百四十五圓にして内公私有林伐採二百六十七萬一千六百六十四圓(四割一分六厘)林野産物二百九十二萬四千八百四十四圓(四割五分五厘)石材土石八十二萬五千四百九十七圓(一割二分九厘)である。

而して之を郡別に観るときは久慈郡の百十七萬四千四百八十六圓が第一位を占め西茨城郡の八十四萬六千八百七十一圓新治郡の六十九萬一千七百十五圓、那珂郡の六十七萬六千八百二圓、多賀郡の六十二萬一千七百九十九圓、東茨城郡の五十九萬四千七百二十四圓の順で其の他五十萬圓を超えざるも

用材	公有	社寺有	私有	計	總價額ニ對スル割合
薪炭材	九、八八八	二、八六二	一、三二五、〇四〇	一、三三三、七九〇	五割〇分一厘
竹材	一一、九五八	七、〇四九	一一、二四〇、八八三	一一、二六〇、八九〇	四割七分二厘
計	二一、三	二四九	七二、七二二	七二、九八四	〇割二分七厘

更に此の用材、薪炭材、竹材を郡別を示せば次表の如くなる。(△印は減)

郡名	用材		計	薪炭材	竹材	價額計	前年ニ比シ増減
	針葉樹	闊葉樹					
東茨城	六五、〇六一	三九、九六七	一〇五、〇〇六	一五、五五五	七三九	二五、九三三	△
西茨城	七九、一七九	一一、七五	九〇、九三〇	八、六八	一、三七八	一、四四〇	△
那珂	二五、七五六	六、八四一	三二、五九七	一、九六六	三、〇五八	四、四四一	△
久慈	三九、〇〇六	三、三三	四二、三三九	一、七、〇八一	七、一〇八	五、四六六	△
多賀	一七、三五八	一、四八九	一八、八四七	一〇、四九九	七、九	二、〇二五	△
鹿島	一、四〇〇	一、二二	二、六二二	八、八八四	二、一〇七	一〇〇	△
行方	二九、九四六	二、七六四	三二、七一〇	七、四九	五、五〇	七、三〇八	△
新治	七、四七七	三、三三	一〇、八〇〇	八、一七	一、四〇	一、五、九〇	△
筑波	五、四〇〇	一、五、四〇〇	一〇、九〇〇	二、五、〇九	八、四六	三、四、一三	△
眞壁	六、七、七三	一、六、一	八、三、八四	六、八八	六、八八	一、五、四九	△
結城	六、五、〇〇	一〇、八、四	一七、三、四	六、五、六	四、七、〇〇	一、五、八、三	△
猿島	一、九、六三	三、七、四	五、七、〇三	三、四、四	四、五、八	八、五、三〇	△
北相馬	三、九、六三	二、八、六	六、八、二九	六、四、六	二、四、一	五、一、五	△
合計	一、一、三、三、三三	一、七、四、四	一、三、〇、七、七〇	一、三、〇、〇、八二	七、三、六	二、二、七、一、六	△

△林野副産物 次に林野における副産物は總價額二百九十二萬四千八百八十四圓にして内木炭二百十萬八千二百七十八圓(七割二分一厘)柴草四十九萬一千六百二十四圓(一割六分八厘)樹實及樹皮二十九萬一千五百十二圓(一割〇分〇厘)筍二萬一千三百四十七圓(〇割〇分七厘)松茸及椎茸五千六百八圓(〇割〇分二厘)其の他五千八百十五圓(〇割〇分二厘)あり、

之を前年に比すれば總價額八萬五千二百六十五圓(〇割三分)の増加で、之を細別すれば木炭は四萬九千二百五十三圓(〇割二分四厘)柴草は二萬百圓(〇割四分三厘)樹實及樹皮は一萬一千四百六十七圓(〇割四分一厘)筍は二千六百六十九圓(一割四分三厘)松茸及椎茸は千八百圓(四割七分三厘)を孰れも増加した。

△石材土石 林野産物の内石材土石の總價額は八十二萬五千四百九十七圓にして内花崗岩五十二萬六千七百八十四圓(六割三分八厘)砂利二十一萬三千四百七十三圓(二割五分九厘)大理石四萬三千三百圓(〇割五分二厘)粘土一萬七千二百二十四圓(〇割二分一厘)其他二萬四千八百十六圓(〇割三分)にして前年に對比し總價額に於て十五萬九千九百五十五圓(二割

二分四厘)を増加したが種類別に於ても花崗岩が六萬八千五百三十九圓(一割五分)砂利が七萬九千八百三十六圓(五割九分七厘)大理石が四千七百圓(一割二分二厘)孰れも増加し粘土に於ては三百七十七圓(〇割二分二厘)其他に於て千七百三圓(〇割六分四厘)を減少した。



宮城縣の視察團

—口繪參照—

宮城縣では昨年五月二十三日統計協會を組織し、之が機關誌として「宮城統計」を年四回發行することゝなつたが、更に同會では本縣同様統計事務優良町村の視察をも計畫し、第一着手として千葉、茨城兩縣へ視察團を派遣することゝなり、一行十四名は同縣統計主事補中村寅雄氏に引率され五月二十六日先づ上京して内閣統計局其他を視察し、翌廿七日は千葉縣市原郡市原村、印旛郡阿蘇村を視察

して二十八日本縣に來り、水戸市内を見物の後午前十時半頃縣廳に來訪、川崎統計課長から本縣統計事務の概要に付て説明を受け、更に本縣統計事務の今昔と其の進歩改善に就ての沿革等をも尋ねた後渡邊本縣屬の案内にて那珂郡佐野村を視察することゝなり午後一時頃自動車を運ねて同村に至り、根本書記並調査員の説明を聞き歸縣した。

我等がまことの

勞苦を知るや



武田村 境 勇

昨年實施せる國勢調査は、國策樹立上實に重且つ大なる調査たるは、何人も良く熟知する所にして、今更喋々論議する迄も無いが、斯くの如く國を擧げて、あらゆる宣傳普及に務め、全國民に其の重要性を深く認識せしめ、以て調査に、申告に萬全を期し、萬遺憾無からしめられたればこそ彼の國家的調査も難無く遂行し得たのである。

蓋し國勢調査とは統計中の人口及び其の動態調査であるが、國家的問題として本調査に次ぐ問題は吾人の生命を繋ぐに必要欠く可からざる我等の主食物たる米、則ち是れを調べる米生産統計調査であつて是亦如何に重要であるかは論を俟たない。

此の意味に於て後者は猶一層國民的

の宣傳を要するの切實なるを思ふものである。

もし本調査が形式上の統計たらむかために折角國勢調査に於て費した努力も後者の爲めに破壊され、國家施政上甚だ寒心に堪えざる状態となりはせぬか。論者或ひは云ふ、前者は一般的にして、後者は一部の農家に限ると、諸君、生産は誠に一部のものなりと雖食する者は是れ全國民ではないか、米生産調査ほど重大なものはないといつても過言でなからう。

國家は今正に非常時中の非常時に際會してゐる、而して此の非常時中の最も重要な食料の問題に關する米生産調査は、此の際一層眞剣に正確に取扱はねばならぬ。これがためには農家を

町村統計主任者異動(上は新任)

- 昭和十一年四月一日 久慈郡東小澤村 川崎 傳之介 (大貫 正夫)
- 四月十二日 眞壁郡上妻村 須藤 兵一郎 (倉持 守三郎)
- 四月三十日 東茨城郡橋村 農林、商工、人口内務統計 大石 吉次郎 (内田 重五郎)
- 學事統計 關 龜松 (長山 藤之介)
- 農林商工統計 全 全 行方郡玉造町 佐竹 有信 (成島 彌一郎)
- 人口統計 池田 健吉 (須原 郡司)
- 五月七日 久慈郡戸村 山崎 秀吉 (藤田 隆治)
- 五月八日 那珂郡靜村 秋山松之介 (秋山 易司)
- 五月十四日 久慈郡生瀨村 鴨志田 一德 (川上 米次)
- 五月十三日 稻敷郡十余島村 小倉 富次 (飯島 平兵衛)

して深く重大意義を理解せしめ、一面調査員の訓練指導に専心し、尙相共に内外より調査員の使命遂行に、國民舉つて力を効されんことを希望して止まざる所である。

殊に前者國調に比し、後者は調査復雜にして數ヶ月に渡り不斷の努力を要するのであるが、斯くても關係者並に我三千九百名の調査員以外、何程か我等の誠の勞苦を知る者がある。

今其の一端を述べてみよう。調査期は八月より十一月に至る四ヶ月事務愈々進みて、則ち水陸稻、粳糯期上中下各等に、十二ヶ所に渡る坪刈地を決定、是れが刈取り算出、經營者作付、各種各等別に反別に對し、該當坪刈高の合勺に至る微細の計算を立てるなど、實に數百回の算入れをなし、是等の計算高を補助票、基準票等各種の書類に記載愈々米生産統計が爰に産るゝのである。

尙更に事務上の体験を述べると、朝

なき。

言ふは安く、行ふは難しと、是れ無上の金言ならずや、況んや我等の仕事は熟練堪能な事務家の執務にあらず、百姓の手なれぬ事務である、農閑期の仕事にあらず、農繁最中の激務である此の激務を！我等調査員の此の心勞を！一般國民がも少し理解し、國勢調査の如き深い關心を以て迎へられんことを切望してやまなす。

人口動態調査票作成に就て

新治郡新 岡田武四郎
治村書記

人口動態調査票作成に就ては縣の指導監督宜敷を得て、最近其の成績著しく向上しつゝある事は、縣の成績發表を以て明瞭である、之れ實に我々同僚の爲欣喜に堪へない、されど近時自治体の紛議續出に伴ひ、町村吏員の更迭も又頻々行はれ、爲に事務に精通する

から晩まで日中田園に出で、營々として農事に勵み、夜は机を友として一心に事務に勉強す。

殊に刻々迫り来る報告期限接近の十月中旬から十一月上旬の如きは農家の田畑共に愈々深刻なる繁忙を増し、晝の活動も又激しく猫の手も借りたい程忙しい時、本調査もまた本格的の筋に入るのである。

即ち朝に出で、夕に歸り、夜は身の責任を痛感して調査事務にセツセと當る時、いつか追迫する疲勞と寐魔と闘ひつゝしばしば鶏鳴の曉を告ぐるを知る、一心力闘、斯くの如き執務數回ならず、斯くして晝は農務に、夜は事務の幾十日かを果して、始めて爰に自信ある我米生産統計が出来あがるのだ。

此の味、此の言、實に調査員にあらずして体験を談じ得る者何ぞ他に有るや。

我言の針小棒大ならざるに、諸君は必ず御共鳴下さる事と深く信じて疑は

の暇なきは勿論、如何に永年勤続者と雖も限りある力を以て無限の國府縣の委任事務に忙殺さるゝの現況にありて諸法規研究の余暇さへ與へられず、一知半解の中に處理するを以て、時折縣の手續を煩すと云ふ失態を醸す、之れ畢竟自己の足らざる結果の致す處とするも、之れが完璧を期せむには先づ小票作成基本たる人口動態調査票及び送致目録作成心得並に通牒等をも改正するの要ありと考へられる。

第一に離婚票の氏名に就ては右作成心得第二節第十二ノ七即ち氏名欄には離婚届書に記載しある夫妻の氏名を記入すべしとあるも、戸籍訓令通牒第六百四號第八百三十一號によれば離婚届書には離婚後入るべき家の氏を稱することを得ざる旨規定せられあるを以て夫妻は何れも同姓である、隨つて小票夫妻の氏は當然同姓となるに拘らず、離婚後の氏を記入する通牒とは甚だ遺憾と思料せらる、依つて之れが作成心

統計調査員異動

(上は新任 括弧内舊)

- 全 五月二十九日 稻敷郡金江津村 (本橋 茂)
- 全 六月二日 行方郡立花村 (今泉 安之助)
- 全 六月十五日 眞壁郡養蠶村
- 全 農林、商工、内務統計 (谷口彦右衛門)
- 全 篠崎 愛三郎 (篠崎 愛三郎)
- 全 人口統計 成田 顯雄 (篠崎 愛三郎)
- 全 學事統計 篠崎 愛三郎 (板橋 梯)
- 全 五月二十一日 鹿島郡息栖村 (大塚 廣一)
- 全 大塚 廣一 (猿田 政一)
- 昭和十一年四月一日 新治郡美並村 齋 藤 簡 (古川 文吾)
- 全 齊 藤 簡 (筑波郡小張村)
- 全 大山 喜三郎 (大山 好雄)
- 全 張替 作次 (木村 安之助)
- 全 青木 平男 (渡 邊 博)
- 全 眞壁郡大寶村

- 全 渡邊 喜代松 (篠崎 信一)
- 全 倉持 林助 (岩上 辰治郎)
- 全 中山 惣治 (中山 秀太郎)
- 全 中山 魁太郎 (桑谷 仲四郎)
- 全 四月二日 幡谷 甚平 (狩 谷 淳)
- 全 羽生 善胤 (羽生 利兵衛)
- 全 石井平左衛門 (井野場 重雄)
- 全 坂本 雅夫 (小沼 勇三郎)
- 全 千ヶ崎 誠一 (遠藤 平次郎)
- 全 菅谷 泰助 (舟串 恭藏)
- 全 荒井 精一 (遠藤 武雄)
- 全 四月十二日 猿島郡逆井山村 (青木 清治)
- 全 青木 彌一郎 (北相馬郡高須村)
- 全 四月三十日 宮本 喜彌 (宮本 信男)
- 全 五月一日 作山 清記 (増設に依る新任者)
- 全 瀧 晋次郎 (全)
- 全 五月二日 飯泉 庫吉 (飯泉 庫吉)
- 全 豊島 登市 (増設に依る新任者)
- 全 飯泉 庫吉 (全)

得を夫妻の氏名は各離婚後の氏名を記入する様、改正あつて然るべきかと思ふ。

第二には本調査は各町村とも殆んど戸籍係に於て作成するものである、然して戸籍係の取扱に掛る戸籍届書類の進達相續税第十二條報告現任人死亡、死産、出生報告等は何れも前月分を翌月十日迄に報告すれば可なるも、獨り小票にありては人口動態調査令施行細則取扱手續第二條に基き、村長より知事への進達は翌月五日迄にして五日迄には日曜ある場合多き爲期限迄に進達は極めて困難なるのみならず、整理期間中無理に進達するを以て自然不備件數も増加するものと考へられるが故に同條中市長の知事に進達する期限同様十日迄にと改正すれば幾分不備件數も減少するものと思ふ。

第三には市町村送致目録中
 (縣府) 役所 の下に村長印を押
 (市郡) (村町) (役場) 捺する定めなるも

の主任を命ぜられてより早くも五年の歲月が過ぎ去つてしまつた。

今では統計事務にもなれて、その業績はどうやら本郡下に於ても認められる様になり、時折は縣よりも褒めの言葉さへ賜るが擔任當時はどうであつたか――。

東西も知らず、左右も辨ぜざる小兒が大原野に一人置かれて宙に迷へる以上にも似た氣持が偽らざる私の心境であつた。統計の重要さはもとより統計の何たるかをも辨へざる私が果して完全に從事して行かれるか、將又如何にしてこの業績の改善向上を計るべきか自分ながら空恐しくてならなかつた。努力だ！研究だ！この二方途に依つて邁進しよう！決心しその年の六月十五日限りの桑苗表報告は私の統計事務のスタートとして切られたがそれはまことに拙いものであつた。

従つて折角苦心して報告した書類は數枚の符箋がついて返送されてしまつ

役場とある箇所村長印とは不合理も甚だしく且誤り易きを以て村長印を押捺する以上、役場とあるを市町村長と之れ亦改正するが當然なりと思ふ、第四には氏名未婚其の他疑はしきものに付ては、從來相違なきことの符箋を貼付したるも、實際取扱上甚だ不便に付右に關しては過般國勢調査の際使用したる檢印を該箇所捺印する様一定すれば能率増進の一助ともなると思ふ。以上に關し之れが適否を御繁忙恐縮ながら縣の係の方に本誌を通じて御指し願はるれば幾分参考ともなり幸甚の到りである。

擔任當時の思ひ出

坂 本 生

十年一日の如しとか云ふが、十年が一日の思ひで過ぎるなら五年は半日に過ぎるであらう、實に過ぎ去りし五年の短かりしことが感じられる。

昭和六年六月就職と全時に統計事務

た、今度もまた今度も……。その度毎に幾度心で泣いたやら、しかしその涙が結晶となつてか次第に事務がわかつて來、統計の完璧を期するには調査員の活動に俟つことの大きなことを初めて痛感した。

調査員の活動！、言ひ易くして仲々行ひ難いことの様には思はれてならなかつたが、先づ是が方法として優良町村の視察に依り實地に見聞し取つて以つて自己の参考に供せんものと縣統計課へ優良町村の御紹介をお願いしたのはその翌年の十一月であつた。縣よりは那珂郡佐野村が最も優秀との御指定があつたので直ちに調査員會を開催して協議を行つた結果、満場一致視察實行が決議された。

その十一月中旬我等關係者一行九名は輝く希望を常磐線列車に乗せて北上し、水戸に下車して白亜の大殿堂、我

全	五月七日	行方郡要村
全	塙 正雄	(平間 鶴二)
全	大場 藤次	(高野 三郎)
全	五月九日	新治郡小幡村
全	藤田 進	(鈴木 政一)
全	富田 福太郎	(鬼澤 鐵之助)
全	羽生 元信	(木 崎 源)
全	高橋 秀夫	(高橋 三郎)
全	五月十二日	新治郡眞鍋町
全	小野 正太郎	(小野 安治)
全	五月十三日	稻敷郡十倉島村
全	成毛 治一	(高木 源助)
全	六月一日	新治郡石岡町
全	櫻井 武平	(竹之内庫之助)
全	六月十一日	新治郡林村
全	小松崎 雅一	(吉川 由太郎)
全	六月十六日	稻敷郡木原村
全	伊藤 暹	(細田 直三郎)
全	四月一日	東茨城郡中妻村
全	大岡 信盛	(大岡 徳廣)
全	野上 敬天	那珂郡玉川村
全	長山 正一	(鈴木 重雄)
全	全	(小磯 熊太郎)
全	全	久慈郡佐都村

全	武藤 好文	(武藤 良雄)
全	山田 昇	鹿島郡輕野村
全	池田 三治郎	(増設に依る新任者)
全	全	行方郡秋津村
全	高野 貫三	(増設に依る新任者)
全	長峰 眞術	(全)
全	星野 太吉	(全)
全	鬼澤 竹雄	(全)
全	飯島 仁	(全)
全	全	新治郡五倉村
全	永瀬 貞一	(鈴木 兼吉)
全	全	筑波郡上郷村
全	秋元 善市	(岡田 清吉)
全	窪田 虎吉	(窪田 榮助)
全	安田 芳一郎	(安田 助三郎)
全	石濱 謙吉	(土田 長吉)
全	草間 忠治	(飯塚 峰藏)
全	土田 進	(土田 彦三郎)
全	鶴見 亨	(淺野 眞市)
全	四月二十五日	東茨城郡上野合村
全	森山 金松	(増設に依る新任者)
全	鳥羽田 廣吉	(全)
全	全	東茨城郡岩船村

等の茨城縣廳に第一步を印し、直ちに統計課を訪づれた。課長殿より激勵の辭を賜り渡邊屬の御案内にて陸前濱衛道に自動車を列ねて佐野村役場に向つたのであつた。同役場は二階建の堂々たる建物で、來意を告げると根本主任は快く我等を二階會議室に招じ、懇切に今日に至れる幾多の尊い經驗談を語られ又種々なる参考書類をみせてくれた。我等は見るもの總てが驚異であつた、根本主任は語られた「總ては熱である努力である」と然り、かねて私の豫期した通りであつた、佐野村統計事務が今日の「充實と完備」を見たのも決して偶然ではない、その背後には斯うした努力家が存在してゐたからであつたことを痛感し同時に我等も懸命なる努力を盡して將來佐野以上たらしんことを深く、肝銘した。斯くして意義深き視察を終りて渡邊屬と水戸驛にてお別れを告げ我等は天下の名瀑袋田瀧に飛沫を浴び更に北進して矢祭山

の絶景を賞して歸村した。

爾來五ヶ年縣統計課の懇篤なる御指導に依りどうやら面目を一新し、本年四月八日には我が村の調査員米賀喜一郎氏は協會より表彰の光榮に浴するに至つた。

生きた學問と云ふものがあるならばそれは實地の見聞であるとは私に斷ずることに躊躇しない。當時を追懐し佐野村の發展を遠く祈りつゝ擱筆する次第である。

此の誇り此の法悦

小野川村 成島 一男

我が國は今や實に有史以來の難局に直面してをる。五・一五事件を一楔機として時局は一時平靜に歸し、國運漸く安定するかにみえたが、それも東の間、突如として吾人に衝動を與へた東京事件は一層時局の重大を認識せしめ

良き國策、實現性あるよき國策が生れねばならぬことを切實に我等は感ぜしめられた。吾等は統計事務に携はり永年資料の蒐集に精進して來た、其の仕事たるや地味、然も興味甚だ薄き數字の羅列に過ぎざれど吾等の手懸にかけし資料が、國運進展の上に權威ある數字として有力なる資料となり、之れによつて生きた國策が生れて行く事を思へば、其處に一人法悦にひたれるの思ひがするではないか。

地方行政についても同様の事が謂ひ得る、其處に吾々は立派な誇りを持ち得るのだが、然し其の誇りも、法悦も、吾人職を統計に奉ずる者及關係者が日々努力精進して權威ある數字を造り上げ、所謂全幅の努力を傾注して行つてこそ、つかみ得るものであり、一時逃れの數字や、甚だしく熱意のない態度にて責をふさぐ程度の統計數字を造つて行つたのでは、夫れこそ一村一縣の問題でない、全國の最も熱心に斯業に従事する人達への迷惑であり、統計界

の尊嚴冒瀆だ。私が今回永年統計事務を擔任せし故を以て統計協會總裁閣下より表彰された事は洵に汗顔の至りである。素より至らざる身の只先輩各位の御指導により過誤なからん事を期せしに過ぎず、未だ全く自信もつかざるに此の榮譽を擔ふ、茲に於て私は今後の私に課せられたる責務の倍加せし事を痛感して益々各位の指導下に、本事務の改善進展の爲めに精進せんことを誓ふものである。要は人間の一生が勉強である如く、職を公に奉ずる以上只止まざる努力あるのみだ。

米生産統計を顧みて

新治村 小倉 茂

昭和八年三月書記を命ぜられ、直に農林商工統計主任となり、何の學識經驗を持たない私には統計の意義は勿論村の概況さへ分らなかつたために、前

小林 誠一	(三村 龍)
五月一日	鹿島郡高松村
辻 注連松	(高木 豊作)
全 全	鹿島郡若松村
宮澤 雄司	(銚子 清次郎)
五月五日	久慈郡中里村
鈴木 茂	(鈴木 國一郎)
吉澤 常夫	(弓野 義雄)
五月二十日	鹿島郡息栖村
石神 寅次郎	(荒井 孝一)
五月十二日	久慈郡世矢村
立原 熊之介	(柴田 國之介)
五月二十日	鹿島郡波崎町
田向 義勝	(田向 進)
藤代 勝治	(藤代 政次)
六月四日	結城郡結城町
稻葉 榮治	(稻葉 純八)
四月十五日	多賀郡鮎川村
黒澤 正	(黒澤 倉藏)
五月六日	全 村
佐藤 義夫	(佐藤 博)
四月一日	西茨城郡若瀨町
仁平 克知	(若色 好男)
全	全 天池田村

瑞 與一郎	(川崎 鐵之助)
瀨谷 益藏	多賀郡鮎川村
五月一日	(瀨谷 藤太郎)
小瀧 義長	西茨城郡七會村
全	(牛久保市次郎)

寄贈圖書

西豊田村勢要覽	結城郡西豊田村役場
卸賣物價月報	商工大臣官房統計課
昭和八年年度年報	東京鐵道局
昭和九年朝鮮の人口統計	朝鮮總督府
大原社會問題研究所	大原社會問題研究所
和歌山縣勢	和歌山縣統計協會
統計(五月號)	千葉縣統計協會
浪花の鏡	大阪府統計協會
福岡縣勢要覽	福岡縣
米 統計	福井縣總務部
麥 統計	全 上
市町村の産業	全 上
生活調査	佐賀縣
昭和十年國勢調査余聞	内閣統計局
統計時報	佐賀縣

任者の折角築き上げた好成绩も遂に崩れかゝり、調査取扱法は却つて調査員の方が明るかつた。

事に當つては己の本務を全うしなればならぬ、何仕事でも自分の仕事より他の方が良く見られると同じ、統計も其の一つと思つて居た、然し何事にも努力の後は何時かは報わられる時もあると深く信じて、取扱細則や前年の資料等により村の状況等を調べたりして、初めて統計の如何に細密にして重要なかを深く惱裡に刻みつけられた。

辛うじて書類の整理研究中、偶々米生産統計調査法の改正となり、初めて受けた指示事項も難解にして何等要領を得なかつた。勿論八年度の調査は相當努力はしたが面積収量等に違算を生じたりした。

昨年は前の経験よりして先づ作付面積の調査を正確にと補助表の作成を速やかにし、日割を定めて一人毎に檢算を厳にし、集計と調査區の面積とを對

照し確めた。また基準票に面積記入終れば再び檢算して出入明細表に記入し全部の終了を待つて交換をなし違算なきを期した。

兼て各調査區を巡回して選定せる坪刈地成績と一般状況とを參酌して反當収量を定め調査票の作成に當つた、統計の使命たる迅速にして且つ正確に調査製表するため、期限を出來得る限り延し、眞の收穫高を耕作人に訊問記入したため七十戸を擔當する調査員は非常な苦心であつた。

斯く努力により調査完了したものは日割を定めて一調査區毎に審査し關係書類を受領した爲か、査閲の際にも違算がなかつた。此れ一重に調査員の努力の賜である。

即ち調査の正確を期するには前に助川氏の述べられたるが如く出來得るだけ調査員の打合せを催し執務順序や取扱方を注意することが最も肝要と思つた最後に益々先輩諸賢の御指導を賜り度くお願して擲筆する。

重要礦物資源資料目錄	資源局
賃銀統計月報	商工大臣官房統計課
統計時報	奈良縣統計協會
兵庫統計	兵庫縣統計協會
大分縣統計書一、二、三編	大分縣
統計時報	内閣統計局
道府縣勸業費豫算	農林大臣官房統計課
工場統計表	兵庫縣總務部調査部
食用農産物統計表	農林大臣官房統計課
昭和人口動態統計記述編	内閣統計局
群馬縣統計書	群馬縣
小賣物價月報	商工大臣官房統計課
統計時報	内閣統計局
統計研究會誌	京都府統計協會
北海道統計	北海道統計協會
工業研究輯覽	資源局
昭和神奈川縣統計書	神奈川縣總務部統計調査課
神奈川縣勢要覽	同上
資源(六月)	資源局
重要生産月報	商工大臣官房統計課
專賣局第三七回年報	專賣局
三重の統計(六月號)	三重縣統計協會
水海道町要覽	結城郡水海道町役場
家計調査報告	内閣統計局



短歌

丹 四郎 選

「夏雜詠」

(賞)
 猿島郡幸島村 小倉 白雨
 麥打てる庭に入り來し物賣はあつき埃に面をむけつゝ
 ○ 稻敷郡太田村 五十嵐 康尊
 早生田植付け終りけふの日の氣安き夕餉妻としにけり
 野良ゆ來し吾れを戀しみ鳴く馬にいとしくなりて草やりにけり

北相馬郡菅生村 倉持 保光
 辨天の祠に古りしさいかちが垂らすさや實の揺れ涼しもよ
 草原の晝には遅きこがね照りむし暑くして人のかけなし
 行方郡大和村 六 統 生

五月雨の怪しき庭のかた隅の八ツ手の古葉また落ちにけり
 夜くだちて降る五月雨を床ぬちにききつゝ明日の田植を思ふ
 久慈郡染和村 豊田 貞次
 月青き夜の草原の露じめり踏みつゝ思ふ人はあらなくに
 行方郡武田村 埴 草風

十二橋たもとたもとに咲く花の首蒲のはなはいま盛りなり

鹿島郡大同村 西 浦子
 疾く起きし父を朝餉に呼びければトマト畑よ笑み現れぬ
 間をおきてうち揚がり居る遠花火納涼の宵もやや更けにけり
 夕かけて雷去りにけり山峽の稻田を渡る風の涼しさ
 蚊遣焚いて友を待ち居る窓の邊にほのかに匂ふ山百合の花
 眞壁郡五所村 谷 貝 英二
 ペンを持つ手の汗さへやぬぐはずに統計調査に餘念なき父
 新治郡藤澤村 愛村 耕夫
 若葉さす窓べにひとり怪びしくも病みてこもれる君をしぞ思ふ

稻敷郡生板村 大野 芽雄
 虫だにもあつさをしれるすがたかなみるも涼しき蟬の羽衣
 ○ 紅原の幽けき合歡の花明り雨の暮間は人の戀しも
 おのづから身は冷え來つれ林泉のこの涼しさは夏のものなり

次回課題

「初秋雜詠」
 締切八月二十日

十首以内



前田 猶春選

題「新樹」「鮎」

○ 鮎釣りに日照雨あかるき瀬岩かな
 行方郡武田村 鳥次 ゆた香
 ○ 同 大和村 内田 六統生
 朝露の雨となりたる新樹かな
 同 武田村 境 草風
 天城山麓
 ○ 八丁池新樹の影の濃かりけり
 久慈郡染和田村 豊臣 貞次
 ○ 鮎釣りに照りつゝ雨の水の上
 鹿島郡大同村 西 浦子
 ○ 露の葉に包みし鮎を貰ひけり
 北相馬郡菅生村 倉持 保光
 ○ そこはかと新樹の匂ふ舗道かな
 同 東文間村 堀越 宵雪
 ○ いさゝかの物買ふ家の新樹かな
 眞壁郡五所村 谷貝 英二

朝の戸の新樹あかるし深呼吸
 ○ 稲敷郡君原村 小松澤 霞翠
 ○ 鮎焼きて主まつ厨灯しけり
 久慈郡久慈町 小川 湖村
 ○ 鮎釣りに里の小川の煙雨かな
 猿島郡幸島村 小倉 白雨
 ○ つながれて山羊のなきゐる新樹かな
 鹿島郡豊郷村 石津 思水
 ○ 鮎釣りの五六尾貰ふて戻りけり
 秀 逸 (賞)
 新治郡瓦會村 増子 よし女
 夜釣の灯さして明るき新樹かな
 ○ 門燈の晝を灯れる新樹かな
 ○ 銅蓮の雨水溢るゝ新樹かな
 ○ 箱あさく並ぶ小鮎を買へにけり

次の課題「扇」「金魚」通じて十句迄

締切 九月一日限り



柳川

山中 緋郎選

『座談會』

座談會思つたよりもうまく出来
 行方郡大和村 内田 六統生
 眞壁郡大村 松崎 ター坊
 どん底の部落を救ふ座談會
 行方郡武田村 鳥次 とり坊
 座談會だけでは偉い事も言ひ
 東京府北多摩郡 田邊 兒太郎
 座談會人氣女優の癖も知り
 函館市 船橋 夢坊
 座談會女ばかりの腫の動き
 京城市黄金町 小島 大口坊
 座談會友の秘密を素つば抜き
 岡山市 西尾 彩壺
 座談會ビールの泡へ喋る事
 東京市王子區 日野 櫻笑子
 座談會遅刻したのがよく喋り
 鹿島郡豊郷村 石津 思水

座談會本間に入り丸くなり

西茨城郡西山内村 森 祿月

座談會仲間外れの様な母

鹿島郡大同村 西 浦子

月を褒め乍ら涼しい座談會

岐阜市外 船渡 さざ波

座談會恩師を偲ぶことに觸れ

京都市中京區 小坂 ふじ彌

座談會濟んでサインをもとめられ

千葉市 泉 瓢堂

座談會男は勝手ものにされ

長野市外 小林 琴の舎

座談會アナウンサーに急かせられ

佳作 東京市神田區 青柳 壽惠緒

座談會はつきり言つて笑はせる

○ 赤かじめ指名して置く座談會

つゝ別な話ともなる座談會

次回課題「ハイキング」

締切 八月二十日葉書一人五句以内
 宛名 茨城縣廳内統計協會
 賞 三才粗賞を呈す

緋 郎

本誌廣告料 値下斷行

大に利用せよ

『茨城統計』は創刊以來一年有餘、特異なる編輯を以て讀者諸君に見え、號を重ねるに隨つて益々發行部數を増し數多ある機關雜誌中斷然群を抜き、縣内は勿論、中央に於ても相當認めらるゝに至りましたことは編輯部同人の欣快とする處であります。

○ 而して我が『茨城統計』は元より營利を目的とするものではありません、收支相償ふことによつて、以て初期の目的に副ふことが出来ますれば結構なことでありますので、今回廣告料金の値下げを斷行致しました。

◆特別
一頁表紙 金貳拾圓なり 金拾五圓に變更
表裏 金拾五圓を金八圓に
半頁同 金拾五圓を金八圓に

◇普通

一頁 金拾圓を金八圓に
半頁 金五圓を金四圓に
四分ノ一金 參圓を金貳圓に

▼同一廣告を引續き二回以上のときは
一割五分、五回以上のときは二割の割引をします。

▼廣告に寫眞挿入又は木版を要するものは其の費用を別に申受けます。
▼廣告料は前納に願ひます。

茨城縣廳

茨城縣統計協會

編輯後記

野も山も青一杯、虚子が咏んだ『風が吹く佛來給ふ氣配あり』の何時しか孟蘭盆だ人は縁をたつねて、汐吹く微風を追つて爽涼を求めあるくであらうが、我等農人は居ながらにして爽涼萬斛、綠一色、夏は吾人の獨壇ともいへる。

X X
本誌年を閲する一年半、號を重ねること十回、爽味萬斛とまではいかないが、幸ひにして各位の深甚なる指導と鞭撻により、やゝ趣きある雜誌になり得たことは喜ばしい。

X X
殊に讀者の皆さんから貴い體驗なり、御

希望なり、御感想なりを澤山に戴いて、誌面を賑はすことの出来ますのは編輯者にとり此の上もない喜びである 今後共どし〳〵お送り下さい。最初に聲明した如く我が『茨城統計』は本縣統計協會の機關であると同時に、諸君の機關であり、諸君の代辯機關であることを高らかにふりかざし、諸君の強固なる城寨として、大いに誇り得るやう致したいと念願してやまない。

—富岡如夢—

昭和十一年七月十三日印刷
昭和十一年七月十五日發行

(隔月一回十五日發行)

一部金十錢

水戸市北三ノ丸茨城縣廳

茨城縣統計協會内

發行兼 川崎末吉

編輯人

水戸市南三ノ丸一〇七ノ二

印刷人 柴博

水戸市南三ノ丸一〇七ノ二

印刷所 柴印刷所

水戸市北三ノ丸 茨城縣廳内

發行所 茨城縣統計協會